

山本貴嗣の本 6

MAGIC RECORDER

魔笛

〈本文2色カラー〉



山本貴嗣

© 2003 Atsuji Yamamoto

MAGIC RECORDER

魔笛

山本貴嗣

前号までのあらすじ

比類なき剣の使い手、女戦士のアーニスは、とある少数部族の反乱に手を貸し、多勢に無勢、奮戦むなしく囚われの身となり生きながら串刺しにされ、あわや刑場の露と消えかけていた。

が、駆けつけた数人の男達によって瀕死のところを救い出される。

彼らは小国シバンの將軍とその配下。

隣接する大国アマルの領土に根城を持つ山賊一味に誘拐されたシバンの王子マハルの救出を、傷ついたアーニスに依頼する。表立って軍を動かせば大国アマルが黙っていない。あくまで秘密裏の奪還を目指すのだ。単身その任に堪えるのは、彼女をおいて他にない。

半不死の肉体を持つ月眼人（つきめびと／セイネム）のアーニスは、癒えぬ体に鞭打って敵地へと乗り込んだ。

見事山賊の山砦に潜入、首領を倒して王子を連れ出したアーニスだったが、復讐に燃える首領の情婦ウルミと、その依頼を受けた魔人パウズが後を追う。

健脚を活かしてパウズは先回り、アーニスたちの迎いの兵を殲滅、その乗船までも粉碎する。

帰還の手段を失ったアーニスと王子。

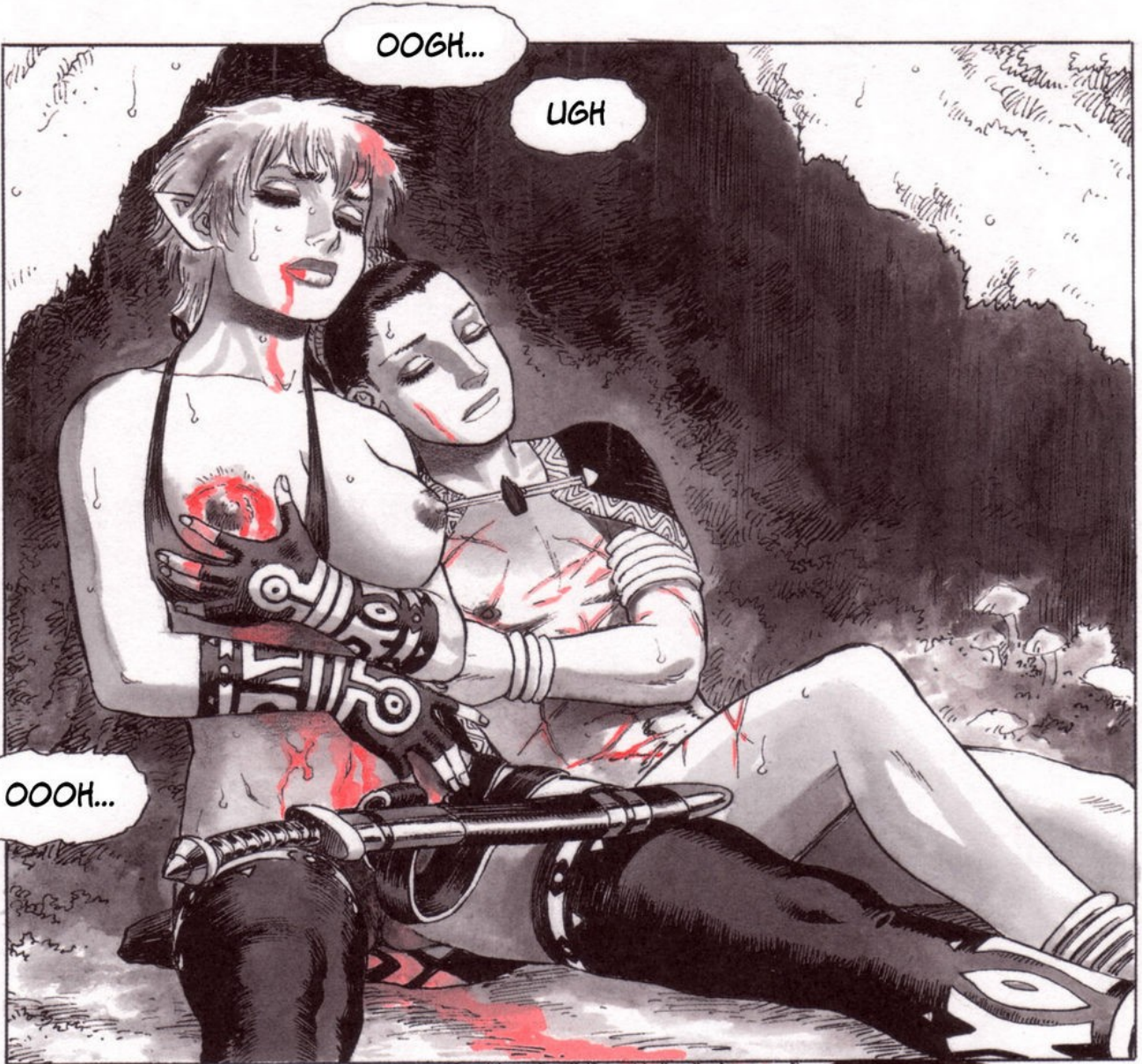
襲いかかるパウズと切り結び、深手を負いながらもかろうじて引き分けたアーニスであったが、パウズの魔剣「腐剣（ふけん）サラシム」の「毒」が、徐々にその身体を蝕み、命を削り始めていた。

ビュウウウウゴオオ



ビュウウウウ





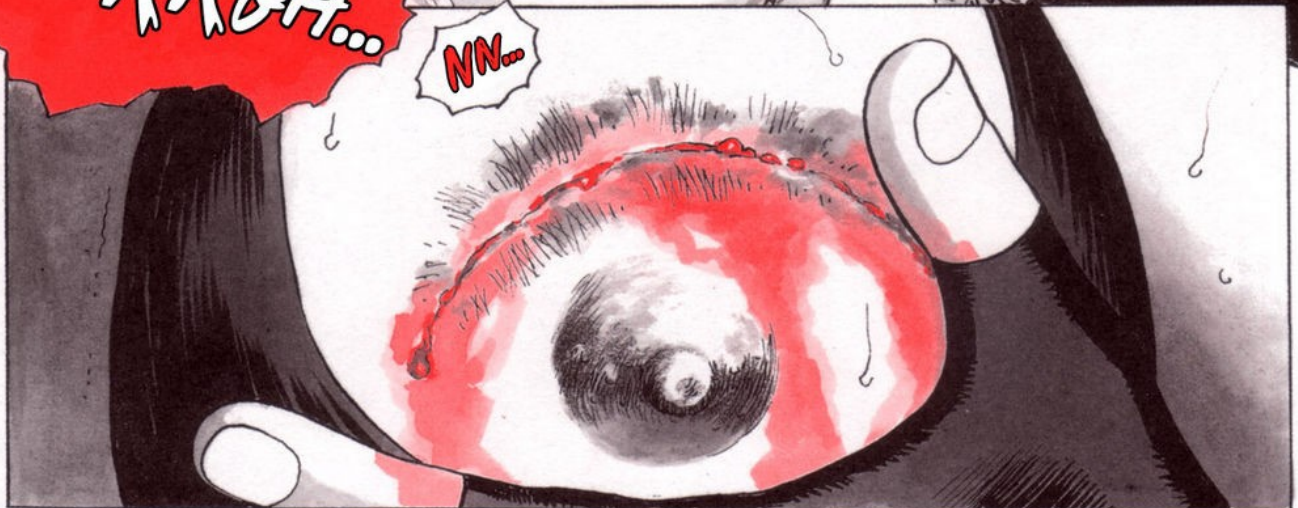
OOGH...

UGH

OOOH...

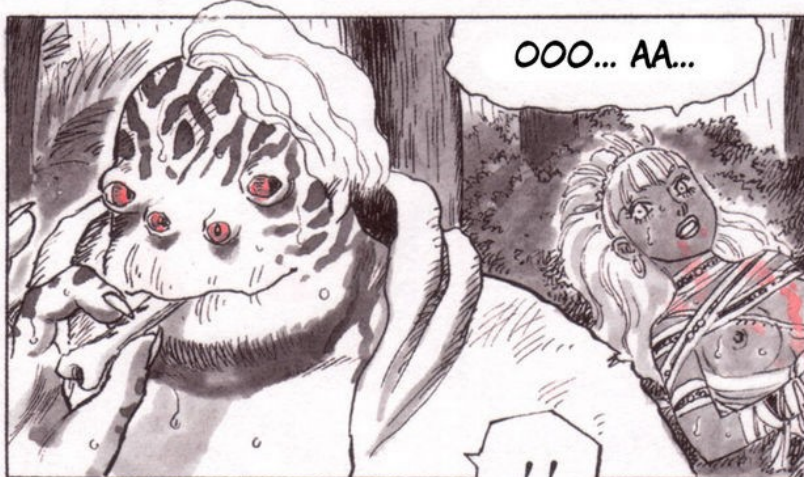
NARRGH...

NN...





UUGH...

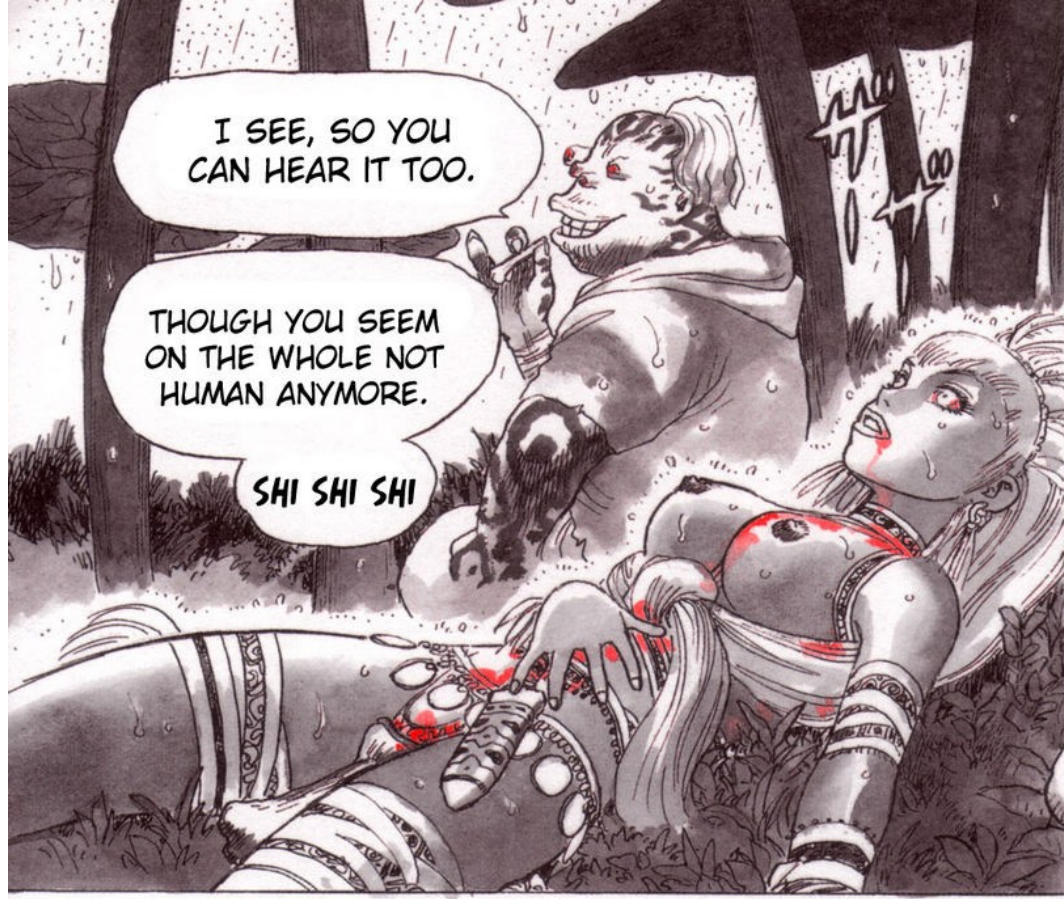


OOO... AA...

!!



WHAT'S THE MATTER, URUMI? YOU THINK THIS RECORDER IS STRANGE?



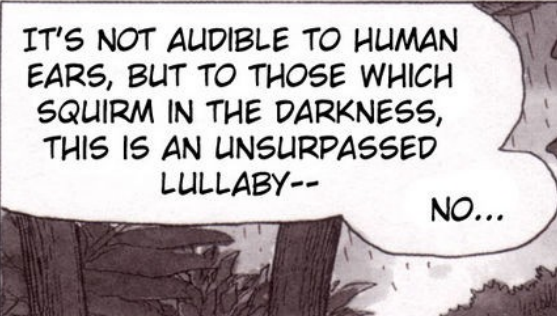
I SEE, SO YOU
CAN HEAR IT TOO.

THOUGH YOU SEEM
ON THE WHOLE NOT
HUMAN ANYMORE.

SHI SHI SHI

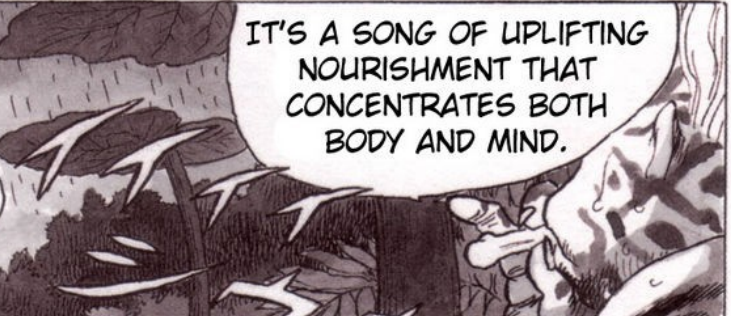


THIS IS
A MAGIC
RECORDER!



IT'S NOT AUDIBLE TO HUMAN
EARS, BUT TO THOSE WHICH
SQUIRM IN THE DARKNESS,
THIS IS AN UNSURPASSED
LULLABY--

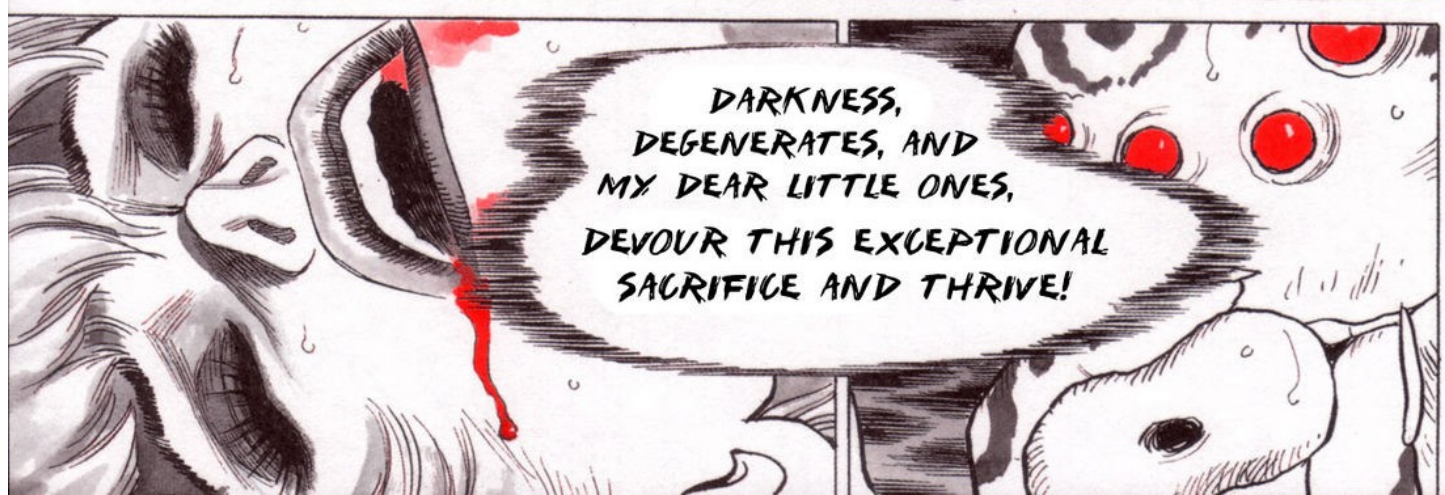
NO...



IT'S A SONG OF UPLIFTING
NOURISHMENT THAT
CONCENTRATES BOTH
BODY AND MIND.



GGRRGHH...
UUUGGHH...



DARKNESS,
DEGENERATES, AND
MY DEAR LITTLE ONES,
DEVOUR THIS EXCEPTIONAL
SACRIFICE AND THRIVE!

ONE FOR A THOUSAND!
A THOUSAND FOR ONE!

A THOUSAND FOR ONE!
ONE FOR A THOUSAND!

AARRRRGH!

GAAAHARGH!!

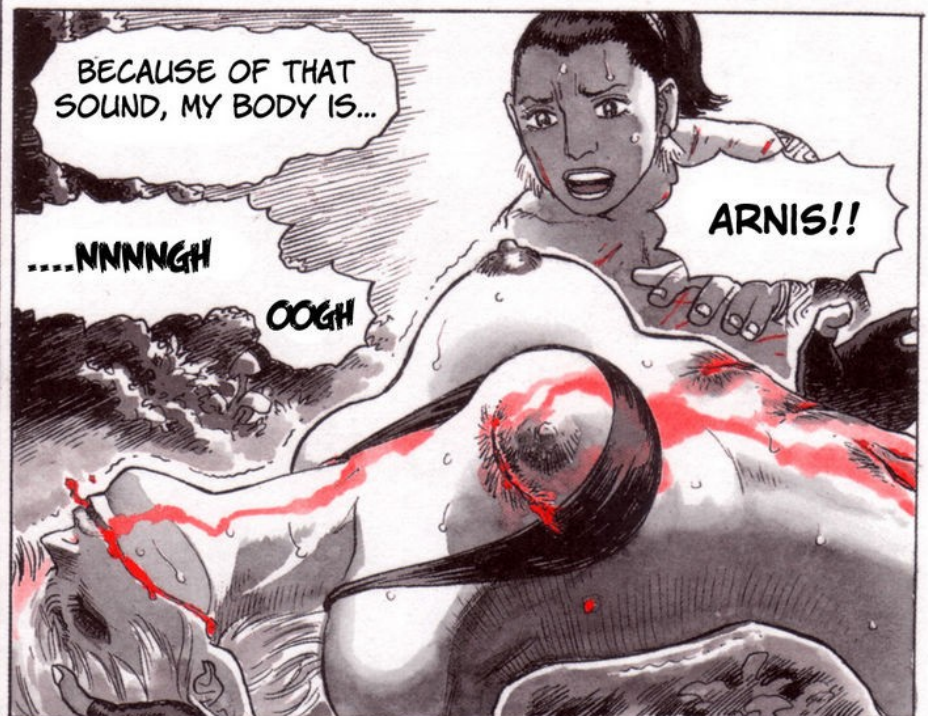
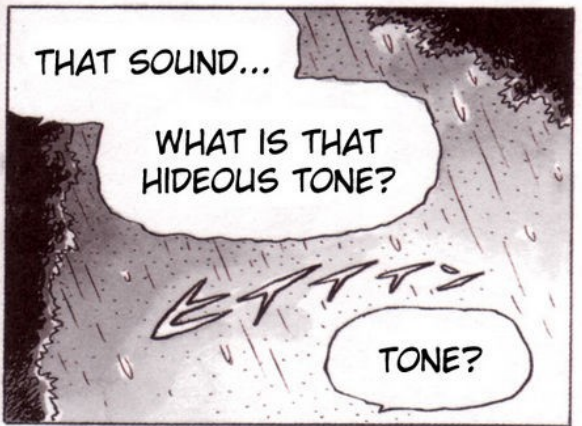
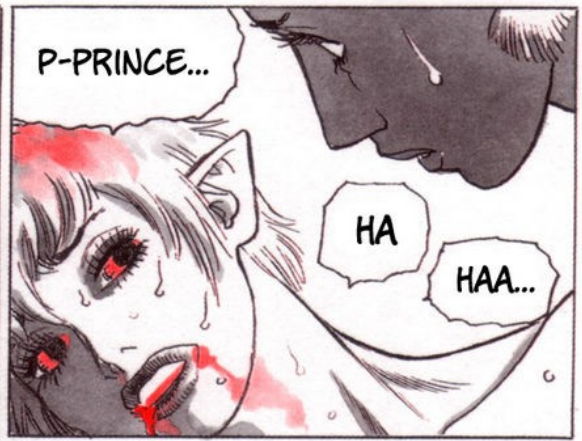
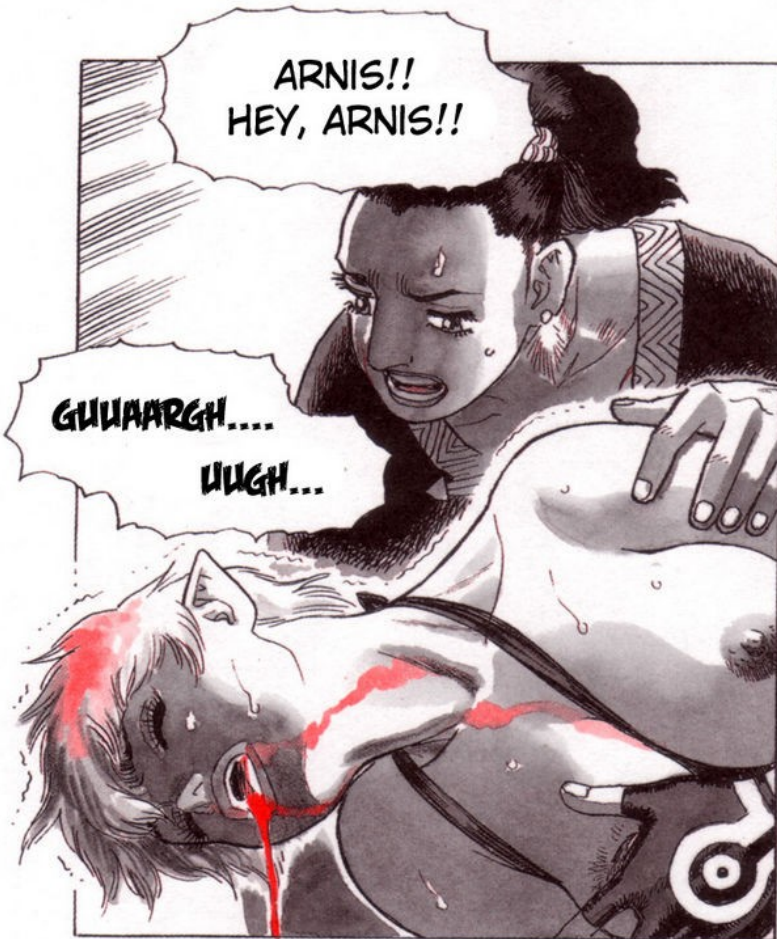
GAARHHAAK!

KUUGH

GUWARGH

!?

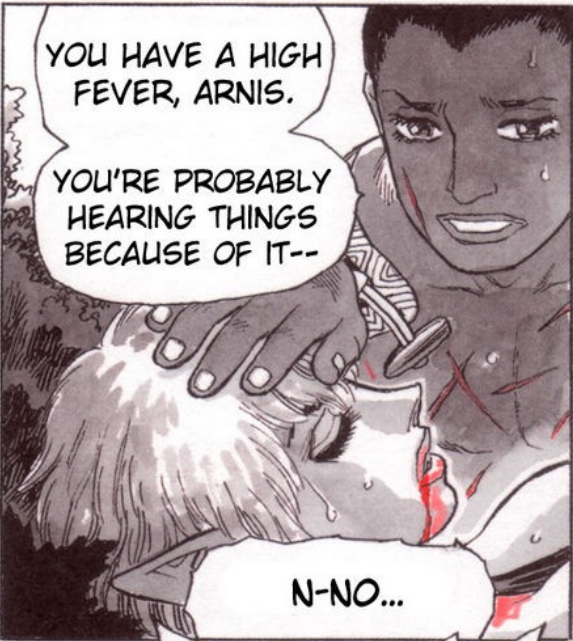
カッ





I CAN'T HEAR IT.

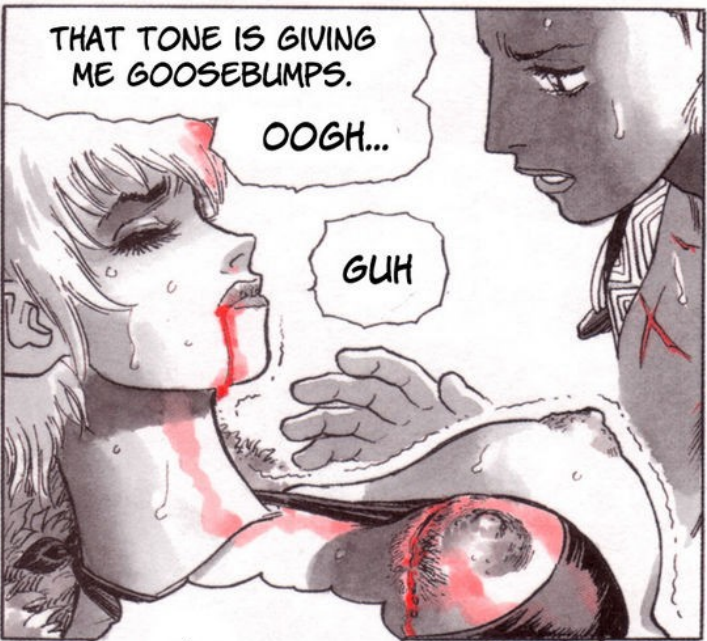
ASIDE FROM THE WIND AND RAIN, I CAN'T HEAR ANYTHING...



YOU HAVE A HIGH FEVER, ARNIS.

YOU'RE PROBABLY HEARING THINGS BECAUSE OF IT--

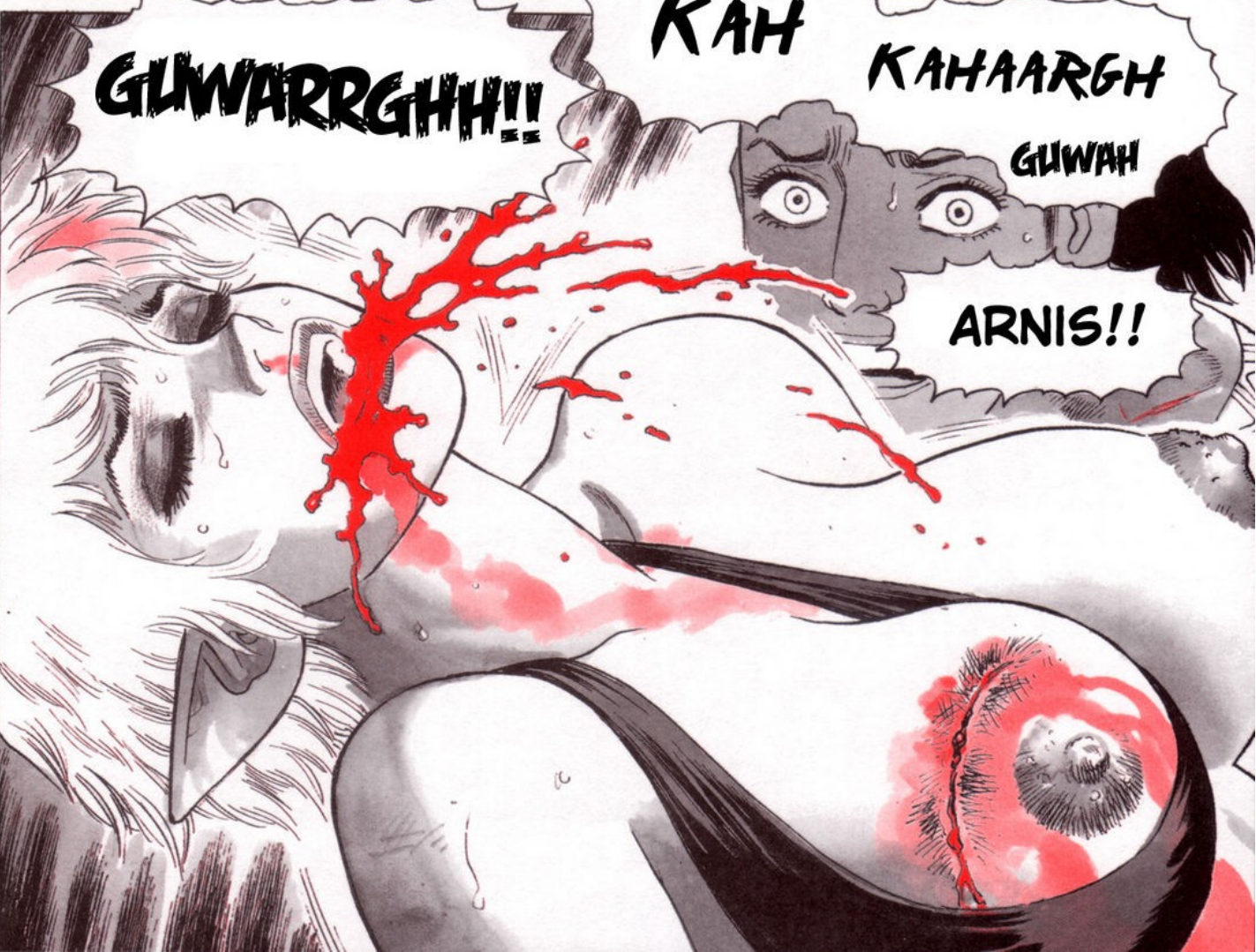
N-NO...



THAT TONE IS GIVING ME GOOSEBUMPS.

OOGH...

GUH



GUWARRGHH!!

KAH

KAHAARGH

GUWAH

ARNIS!!



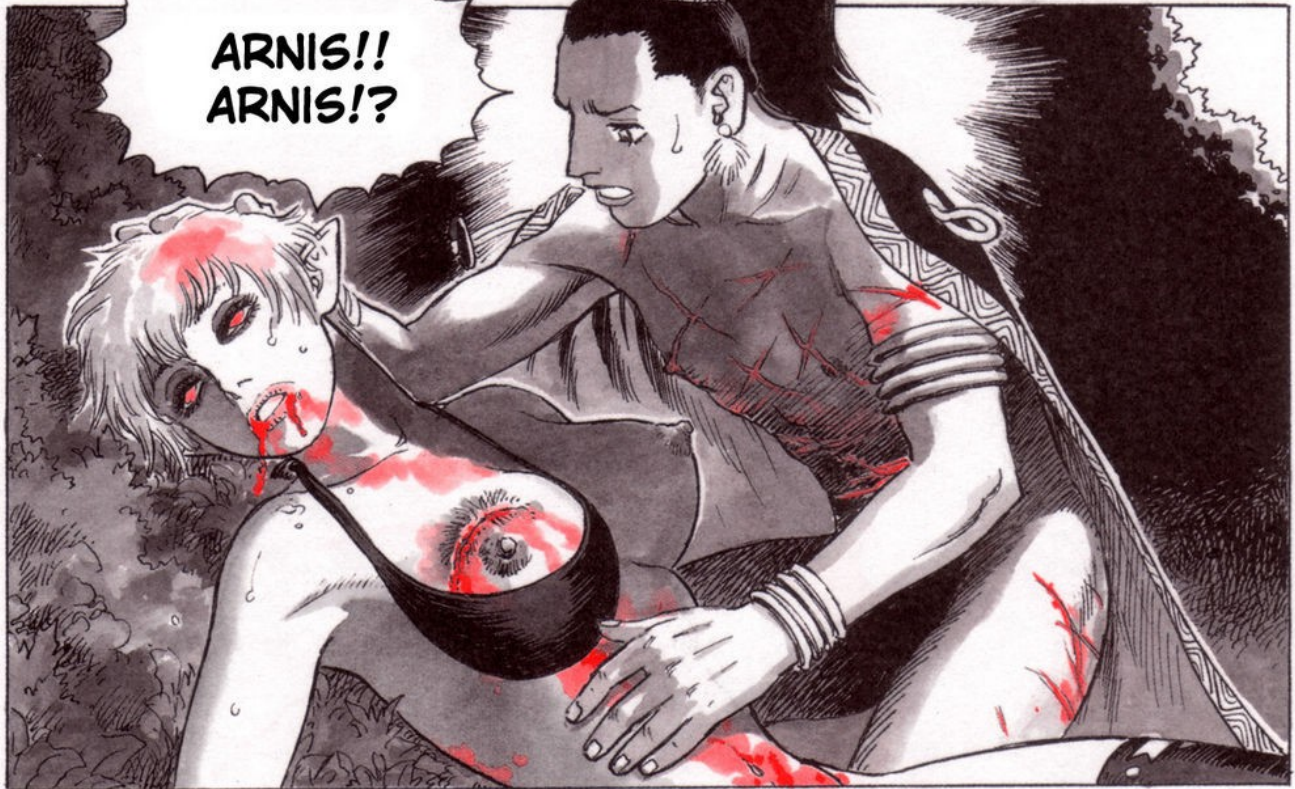
SHI SHISHISHI!
GOOD...GOOD...

THE LITTLE ONES
ARE CLIMBING UP
THE STAIRWAY...



I'LL MAKE THE
SWEET POISON
SAP OVERFLOW,
LITTLE BY LITTLE!

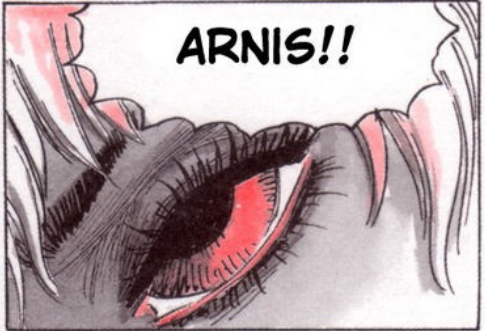
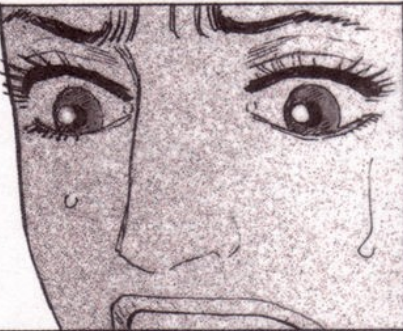
SHI SHISHISHI!



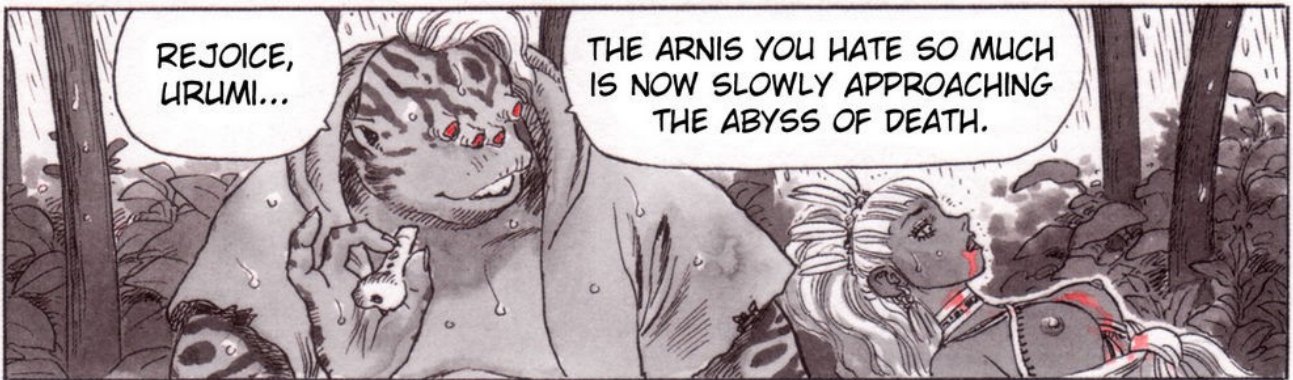
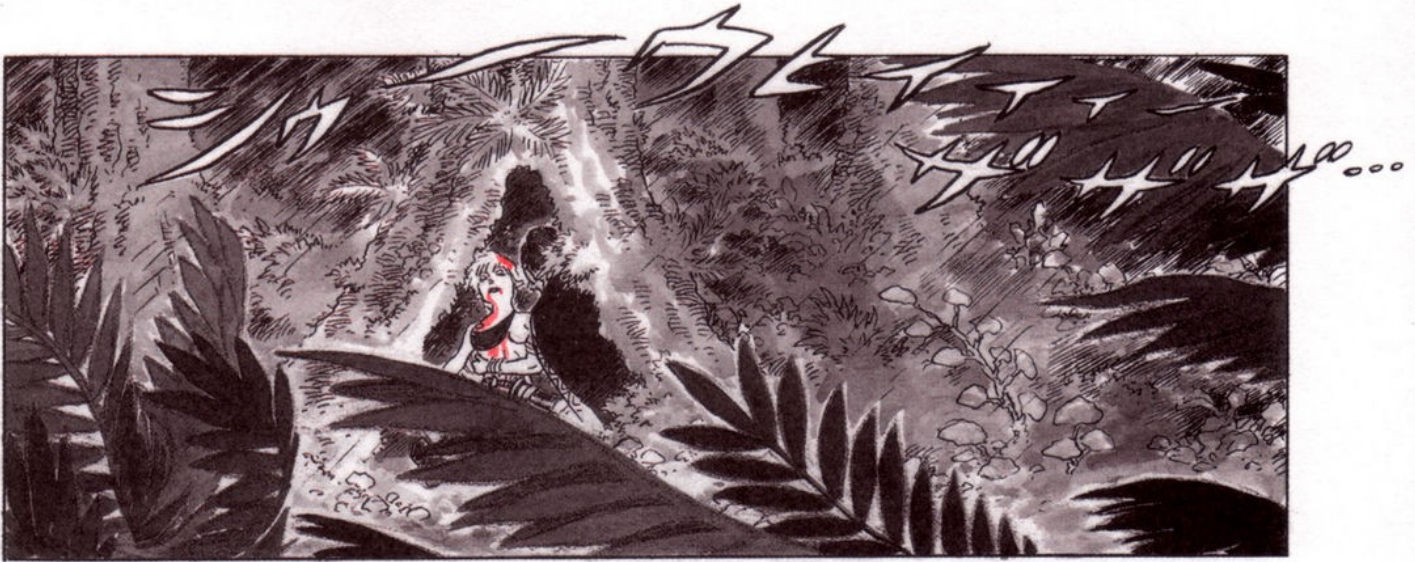
ARNIS!!
ARNIS!?



DON'T DIE!! DON'T
TELL ME THAT YOU'RE
GOING TO LEAVING
ME BY MYSELF...

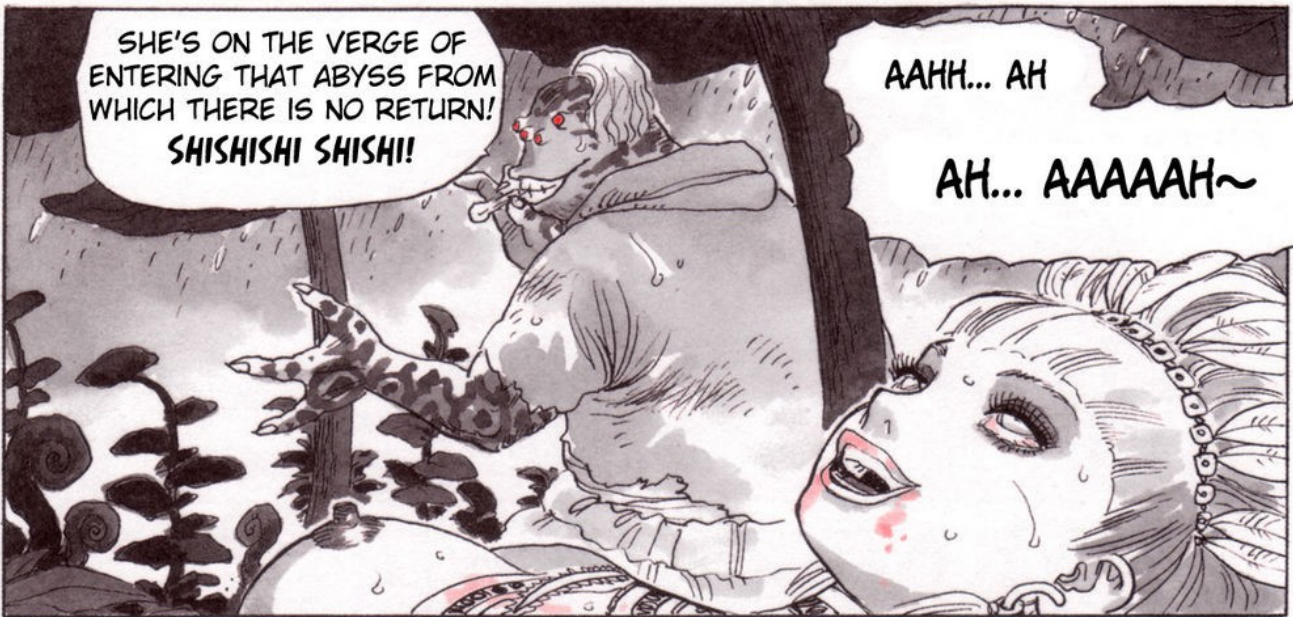


ARNIS!!



REJOICE,
LIRUMI...

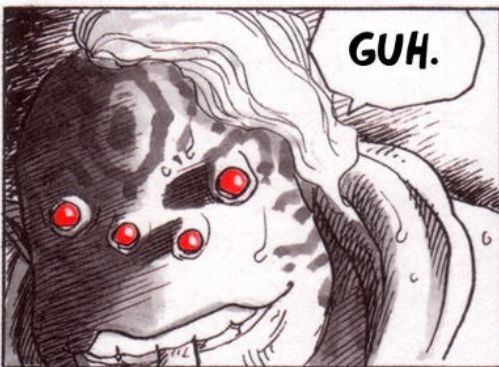
THE ARNIS YOU HATE SO MUCH
IS NOW SLOWLY APPROACHING
THE ABYSS OF DEATH.



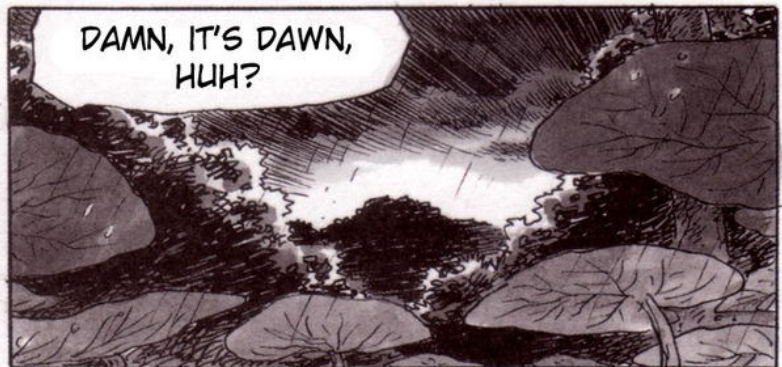
SHE'S ON THE VERGE OF
ENTERING THAT ABYSS FROM
WHICH THERE IS NO RETURN!
SHISHISHI SHISHI!

AAHH... AH

AH... AAAAAH~

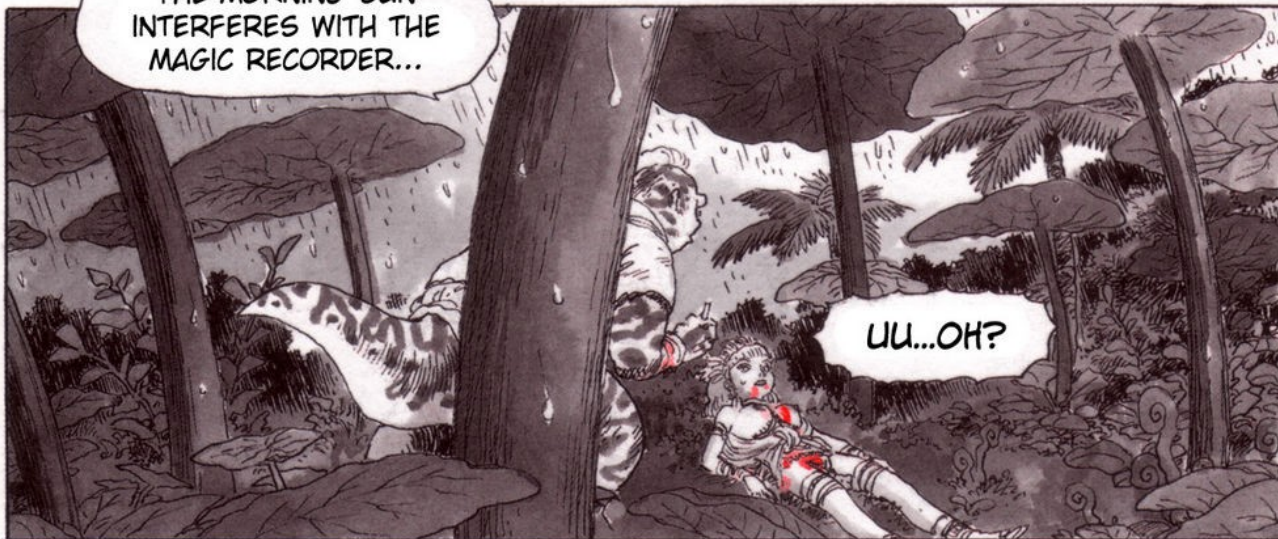


GUH.



DAMN, IT'S DAWN,
HUH?

THE MORNING SUN
INTERFERES WITH THE
MAGIC RECORDER...



UU...OH?

DON'T BE ANGRY, URUMI.
IT HAD EFFECT FOR
TWELVE MINUTES.



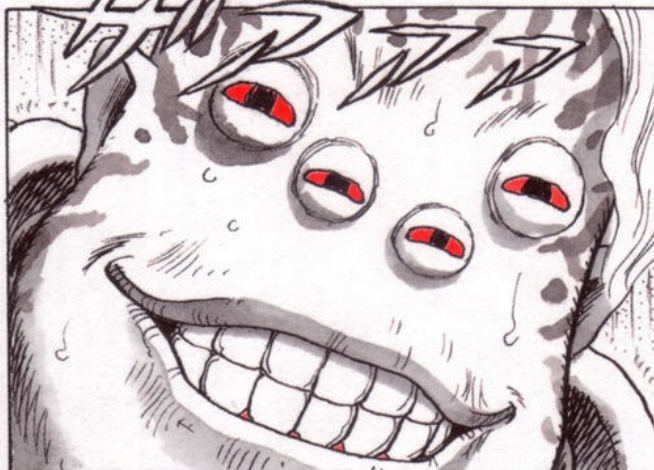
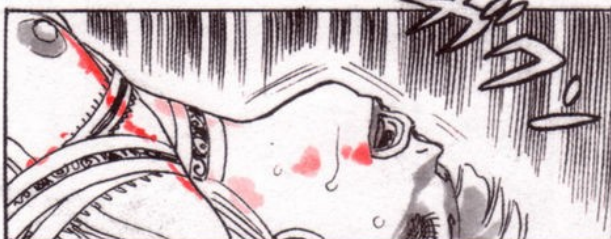
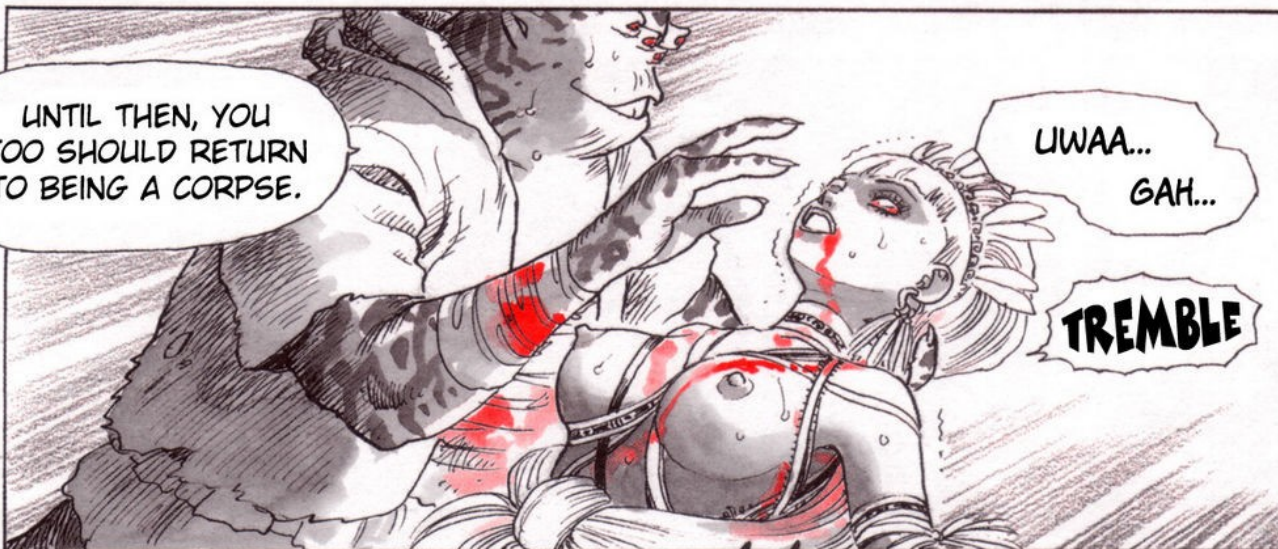
THE ARTS OF DARK-
NESS CANNOT WORK
DURING THE DAY.
LET'S LOOK FORWARD
TO THE NEXT SUNSET.



UNTIL THEN, YOU
TOO SHOULD RETURN
TO BEING A CORPSE.

UWAA...
GAH...

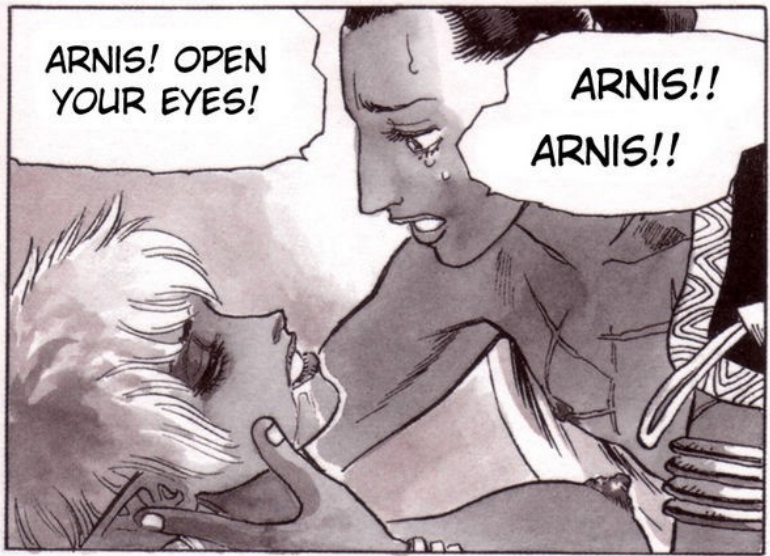
TREMBLE





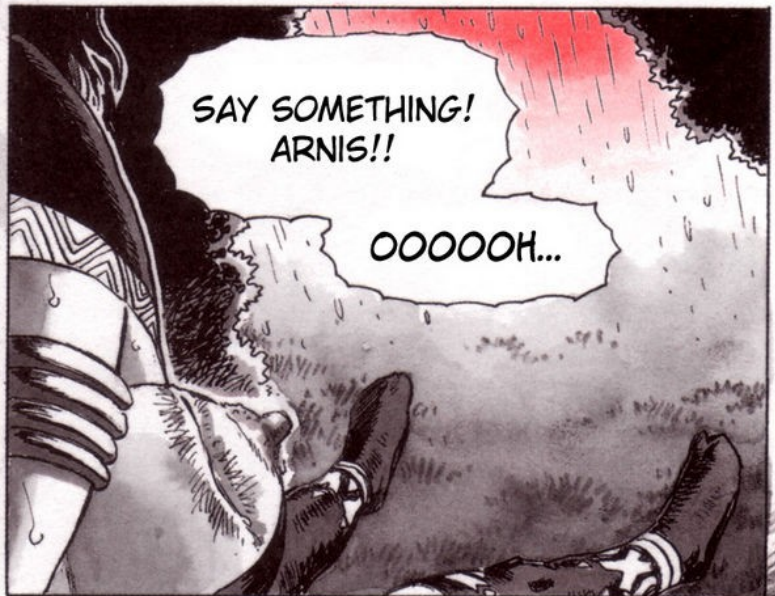
OOOH... OOH...

OOOH...



ARNIS! OPEN YOUR EYES!

ARNIS!!
ARNIS!!

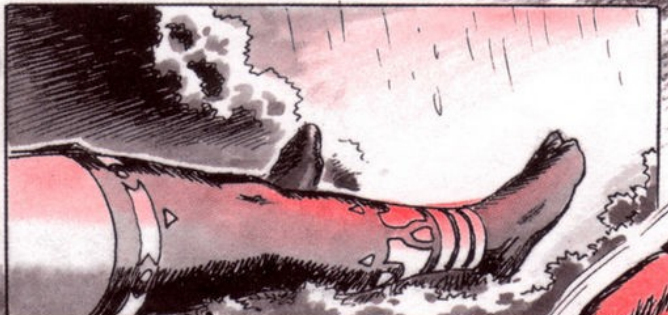


SAY SOMETHING!
ARNIS!!

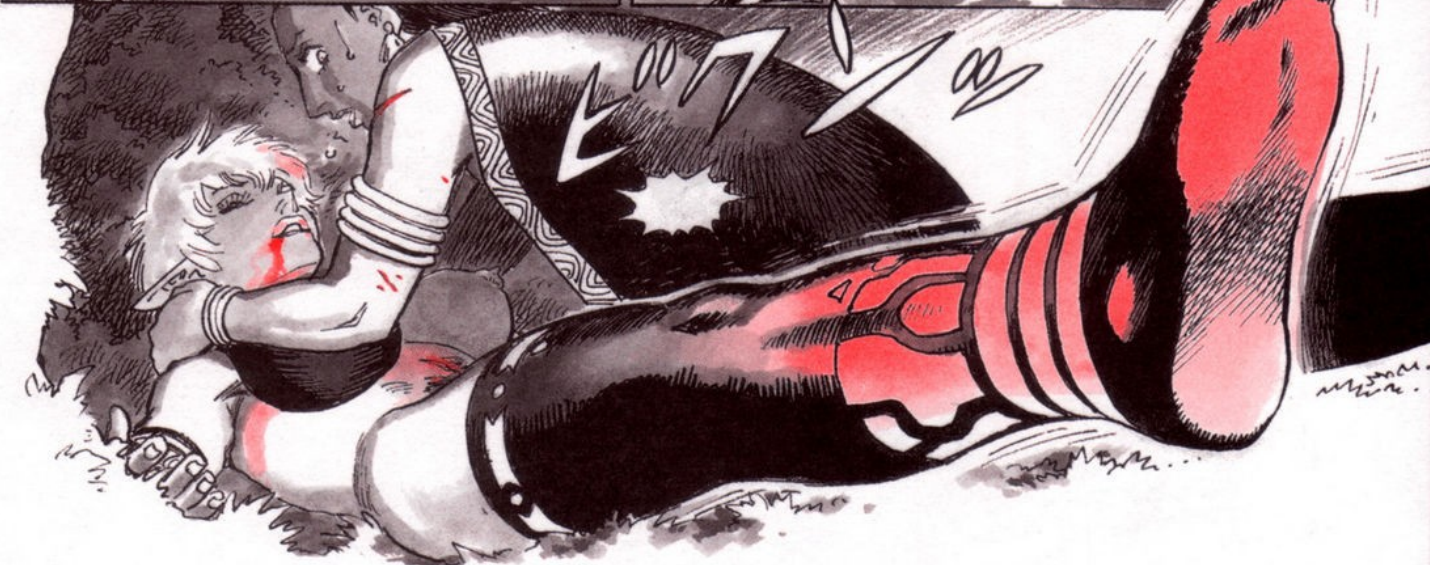
OOOOOH...



アアア



アアア



GUWARRGHK

ARNIS!

THANK GOODNESS!
YOU'RE ALIVE!

COUGH
GUH...

EVVVVUGH

A-ARE
YOU OKAY?

ACTUALLY...

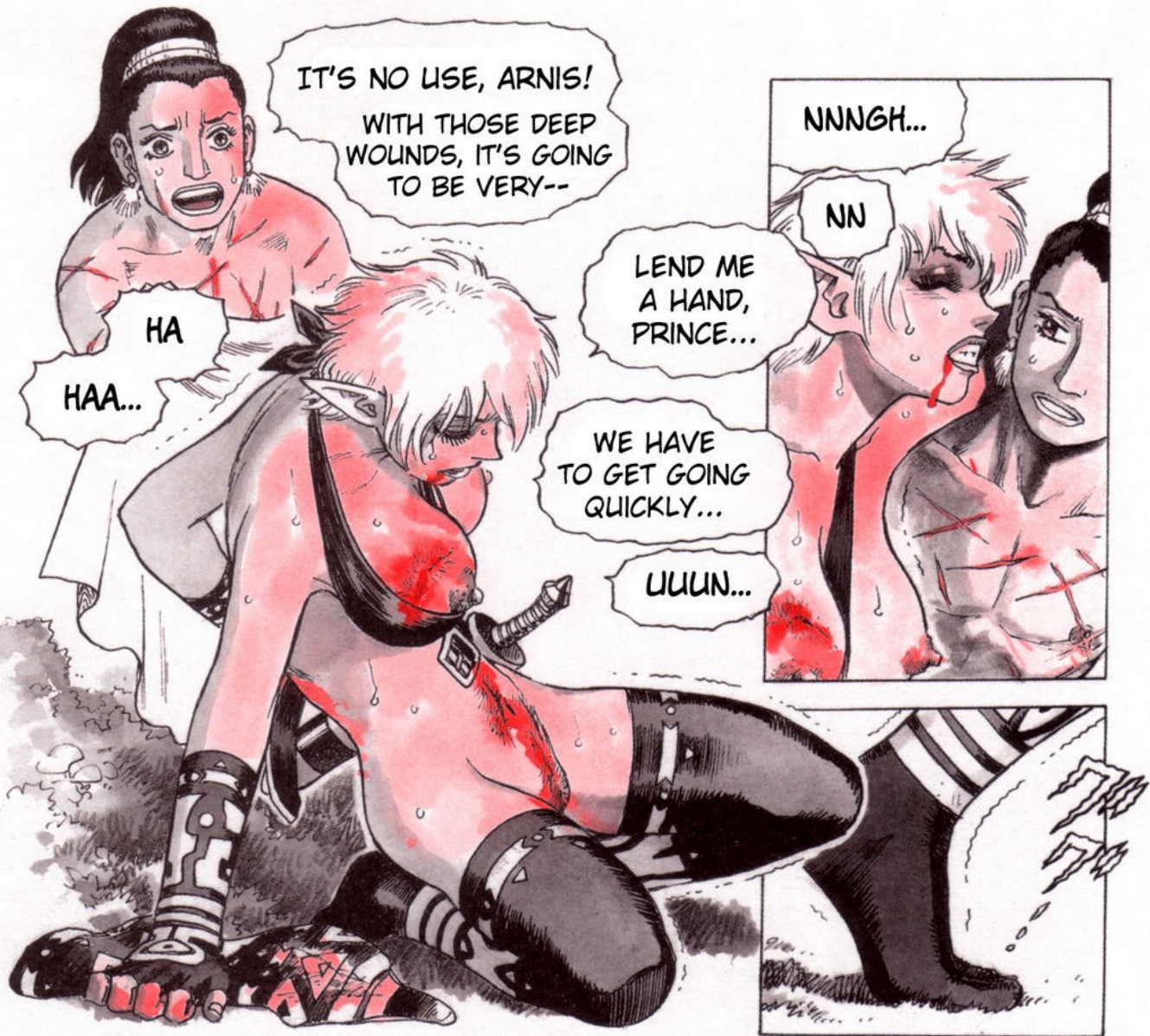
I'M SORRY...
I DID SOME-
THING FOOLISH.

DON'T WORRY ABOUT
IT, PRINCE. I JUST
OVERSLEPT A BIT.

**DRIP
DRIP
DRIP**

WE MUST...

...GO...



IT'S NO USE, ARNIS!
WITH THOSE DEEP
WOUNDS, IT'S GOING
TO BE VERY--

HA
HAA...

LEND ME
A HAND,
PRINCE...

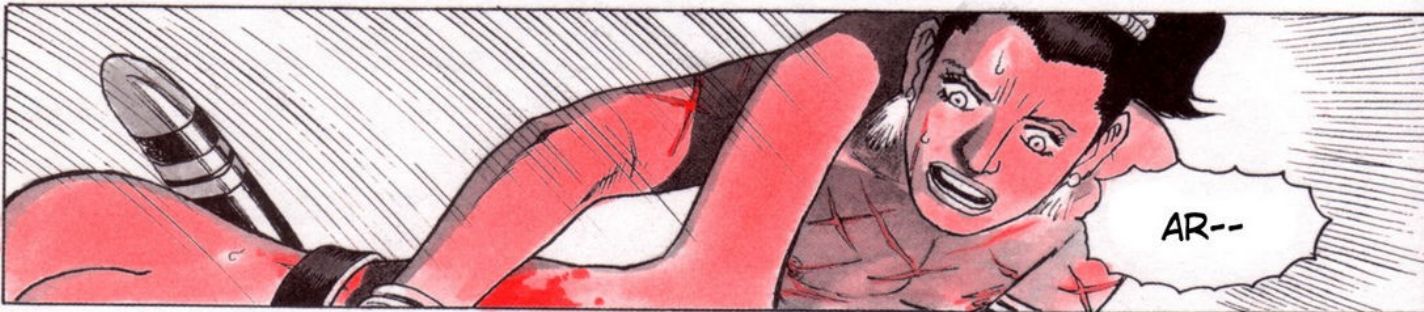


NNNGH...

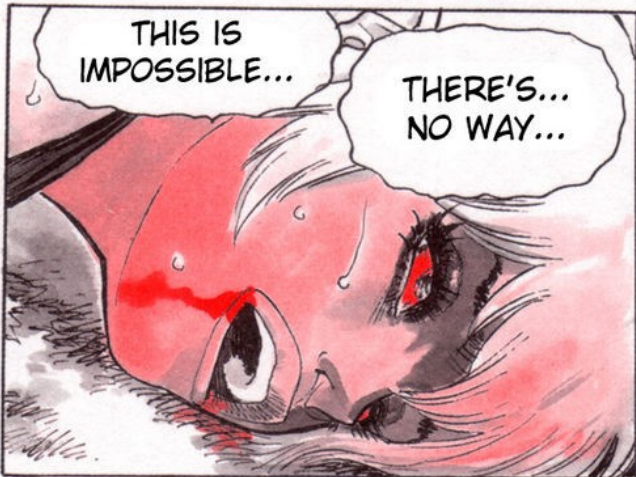
NN

WE HAVE
TO GET GOING
QUICKLY...

UUUN...

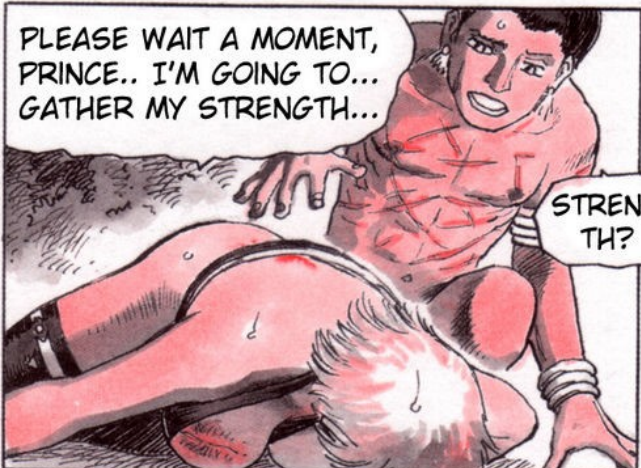


AR--



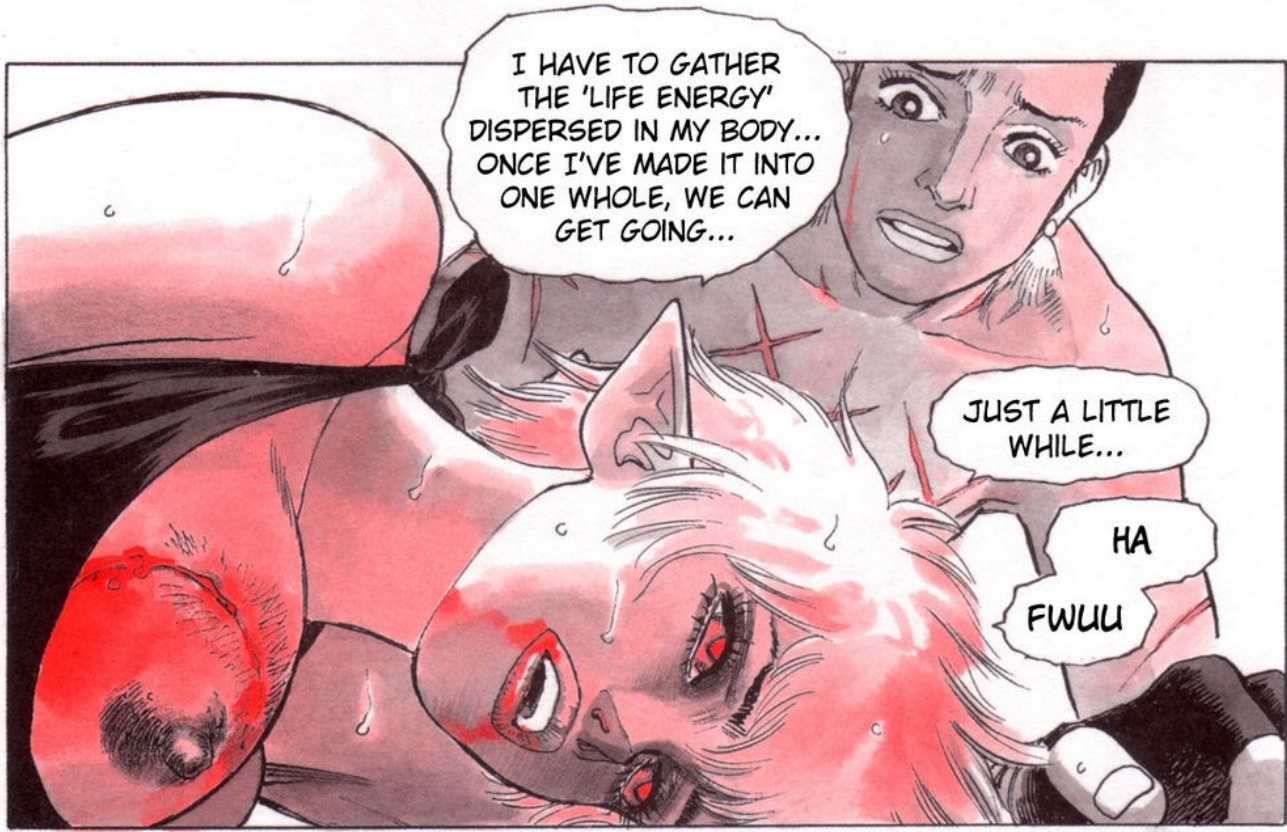
THIS IS
IMPOSSIBLE...

THERE'S...
NO WAY...



PLEASE WAIT A MOMENT,
PRINCE.. I'M GOING TO...
GATHER MY STRENGTH...

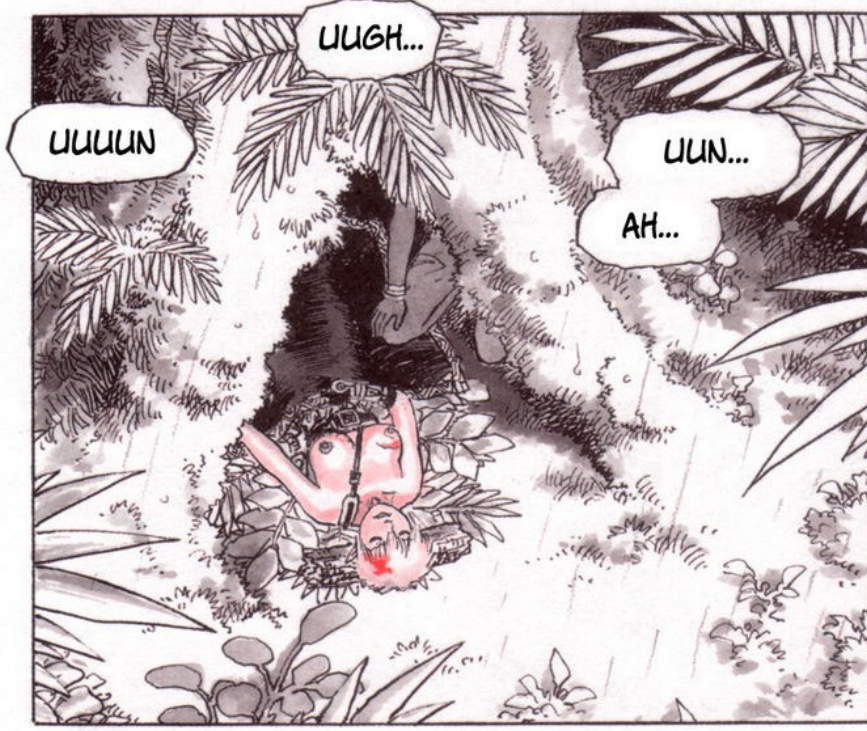
STRENG
TH?



I HAVE TO GATHER THE 'LIFE ENERGY' DISPERSED IN MY BODY... ONCE I'VE MADE IT INTO ONE WHOLE, WE CAN GET GOING...

JUST A LITTLE WHILE...

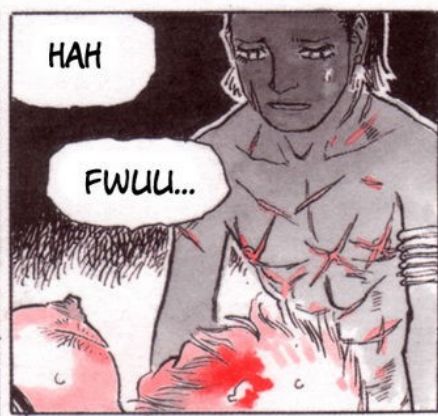
HA
FWUU



UUGH...

UUUUUN

UUN...
AH...



HAH

FWUU...

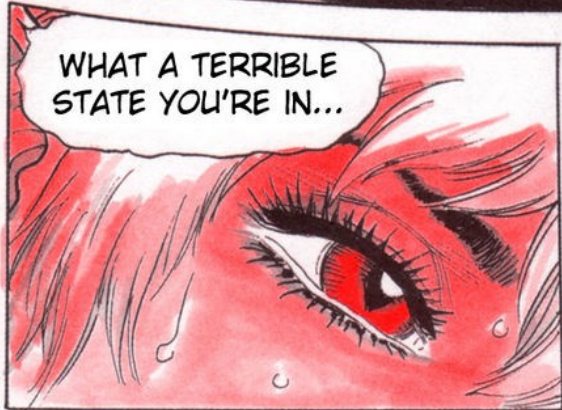




UUU... UUN.

...!!

HUFF

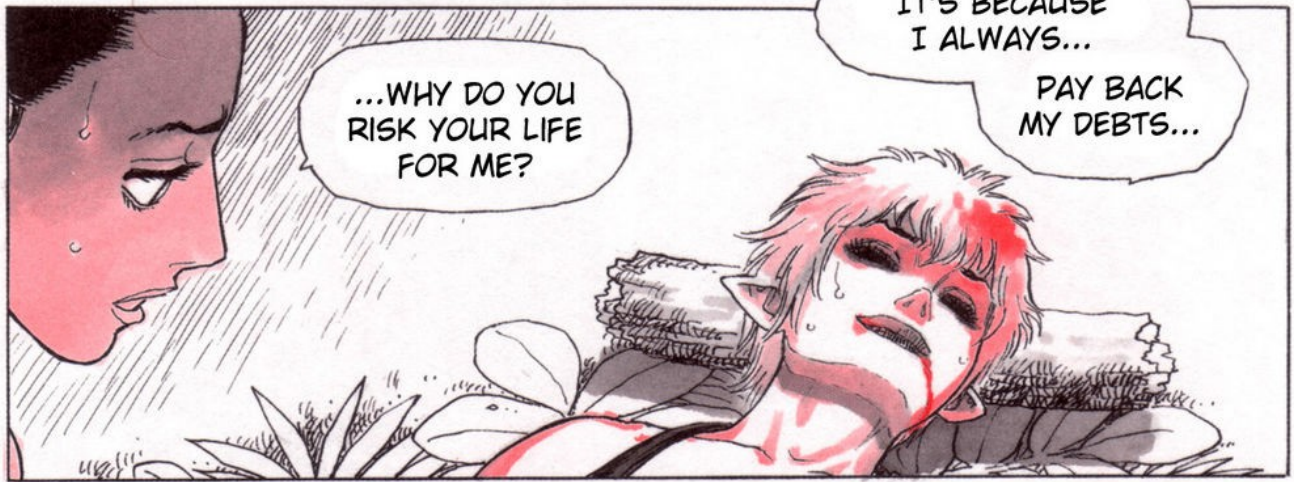


WHAT A TERRIBLE STATE YOU'RE IN...



WHY...? WHY DO YOU GO SO FAR TO DO THIS?

YOU'RE NOT EVEN A ROYAL RETAINER SO WHY...



...WHY DO YOU RISK YOUR LIFE FOR ME?

IT'S BECAUSE I ALWAYS...
PAY BACK MY DEBTS...



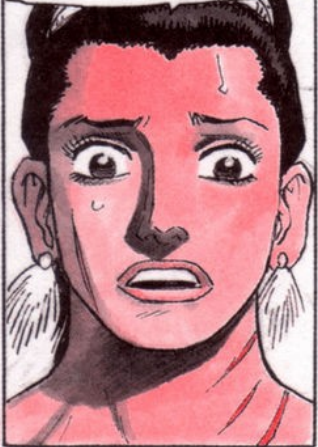
I WAS SAVED FROM THE EXECUTION GROUNDS OF THE COUNTRY OF AMORI BY YOUR RETAINER.



I SEE...!
THE BANDITS WHO KIDNAPPED ME HAVE THEIR HEADQUARTERS IN THE TERRITORY OF THE GREAT COUNTRY AMAL!



I WAS ENTRUSTED WITH YOUR RESCUE. I COULDN'T REFUSE.





IF THEY CAN SEND OUT THE REGULAR SOLDIERS, THEY WOULD ATTACK AMAL'S GARRISON.

AND THEY WOULD MAKE AN ASSAULT ON MY SHIBAN. ON THIS INFALLIBLE PRETEXT...



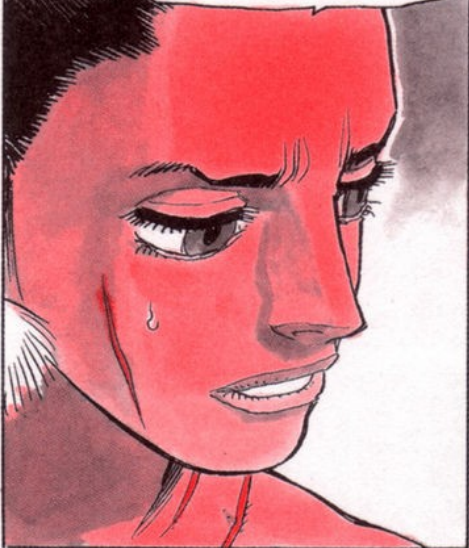
AND THAT'S WHERE A WARRIOR OF DARKNESS LIKE ME COMES IN...

I SEE... SO THAT'S IT...

THE RESULT OF MY CARELESS HUNT... ...MADE YOU GO THROUGH TREMENDOUS SUFFERING, DIDN'T IT?



FLU...



WHAT'S SO FUNNY?

FOR A ROYALTY, YOU'RE PRETTY UNUSUAL...



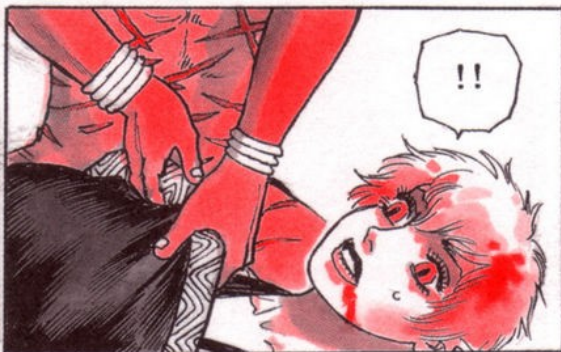
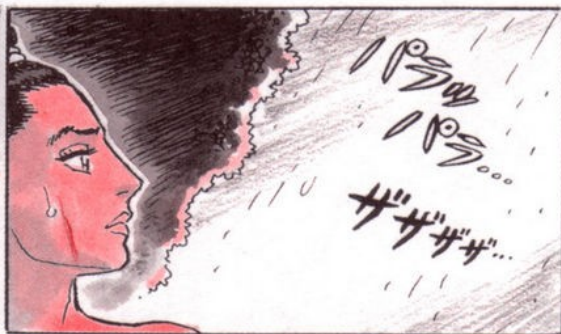
I WONDER IF THAT KINDNESS IS FROM YOUR MOTHER OR...

MOTHER!?
ARE YOU ACQUAINTED WITH MY MOTHER?

CAN WE LEAVE THAT FOR ANOTHER TIME, PRINCE?

RIGHT NOW, I SHOULD CONSERVE EVEN MY STRENGTH TO TALK...

OH... SORRY.



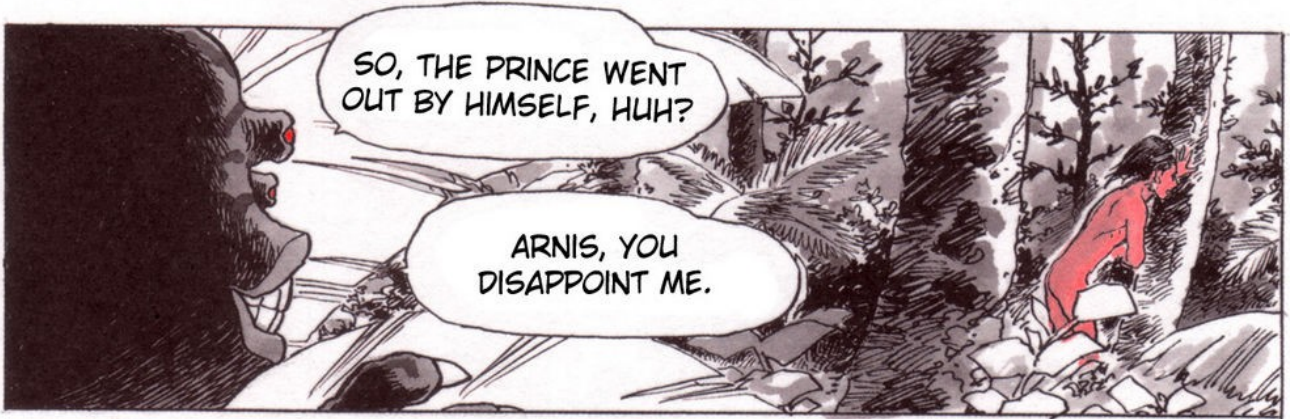
I'LL GO SEARCH FOR SOME MEDICINAL HERBS.

PLEASE LET ME DO SOMETHING AS WELL.

I'LL BE BACK SOON.

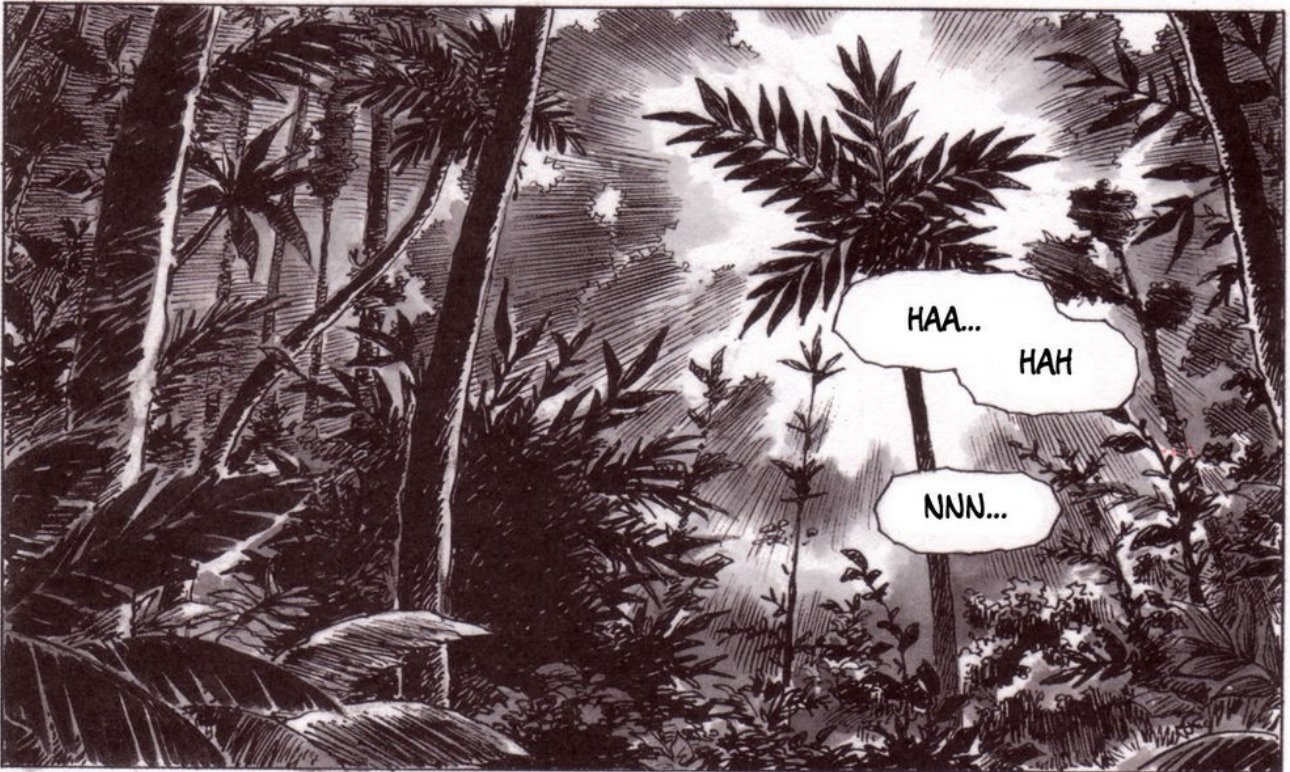
WAIT, PRINCE! DON'T GO!





SO, THE PRINCE WENT
OUT BY HIMSELF, HUH?

ARNIS, YOU
DISAPPOINT ME.



HAA...

HAH

NNN...

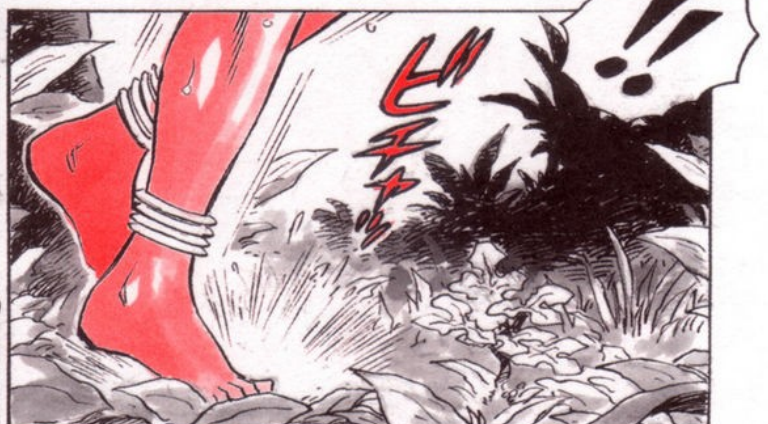


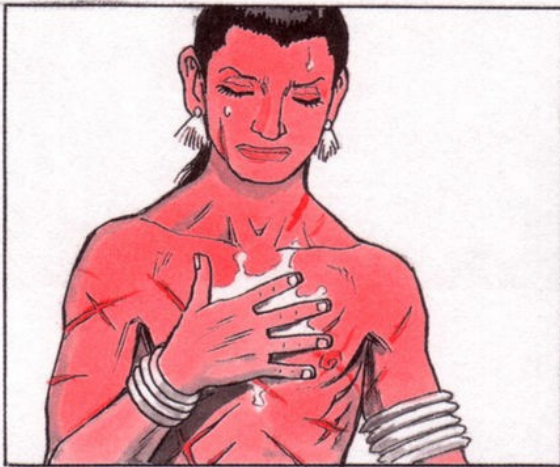
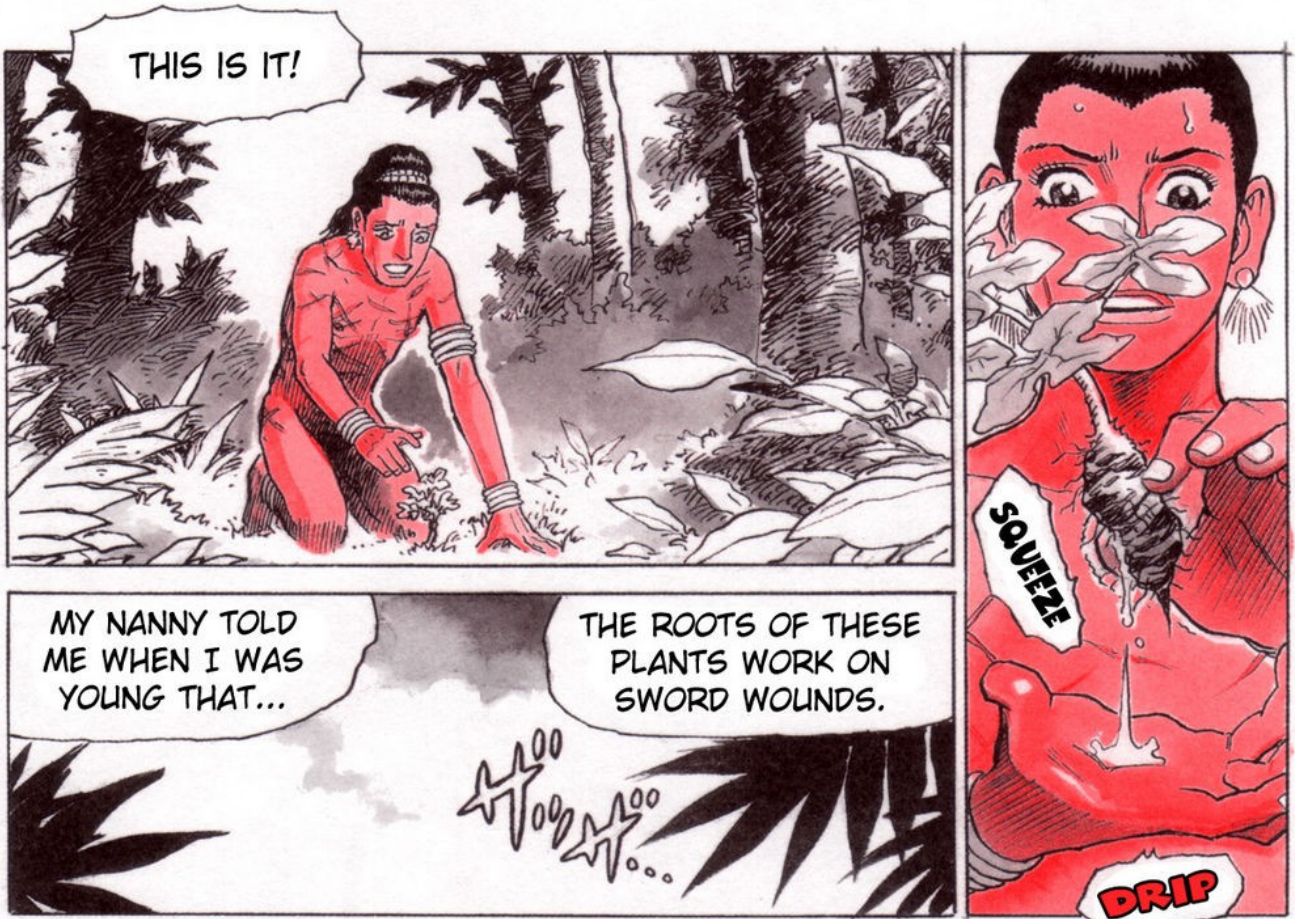
THESE TRIFLING
WOUNDS...

THEY ARE
NOTHING WHEN
COMPARED TO ARNIS'!

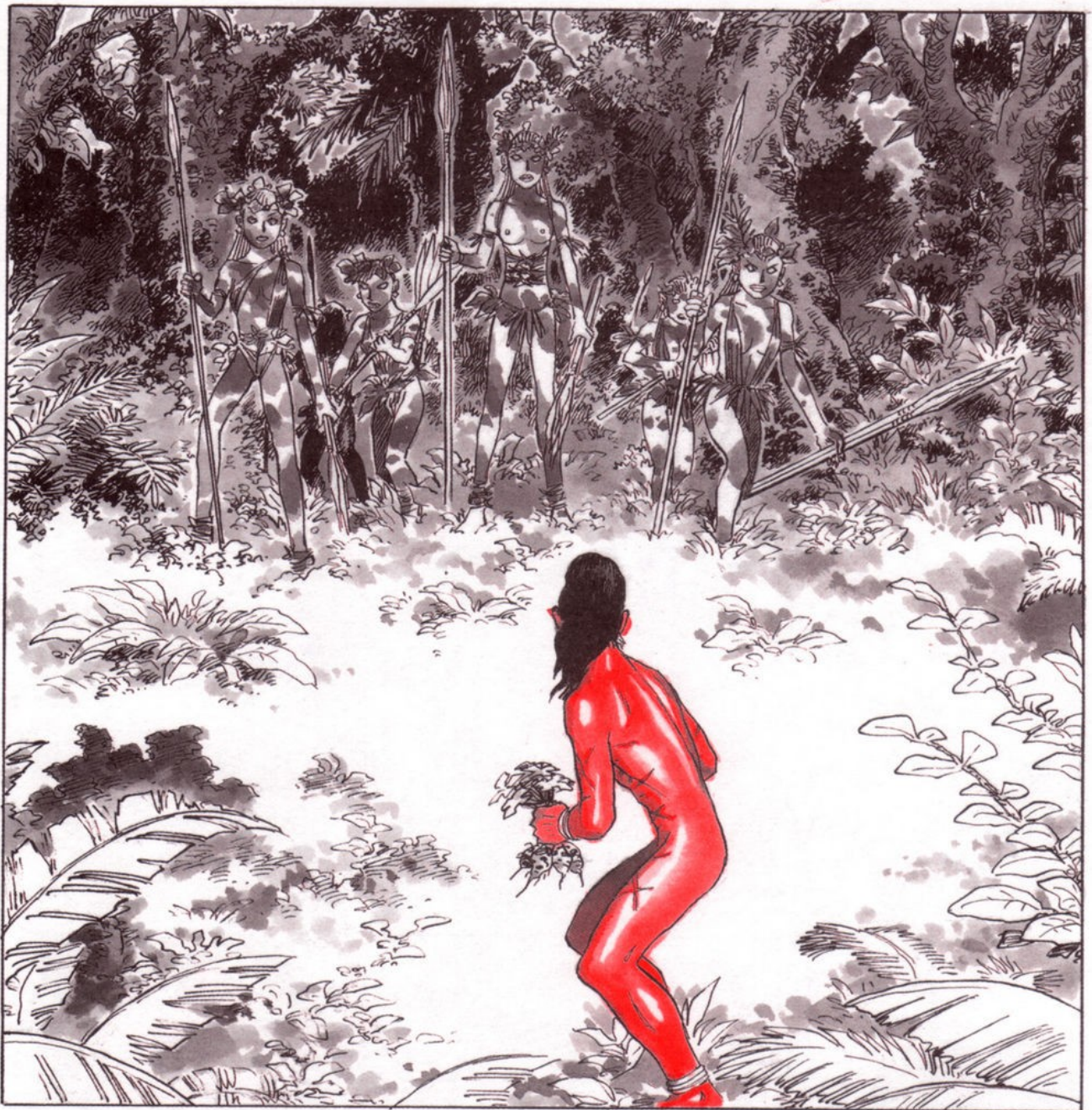


LUCKILY,
THERE'S RAIN...











STOP IIIT!



THUD

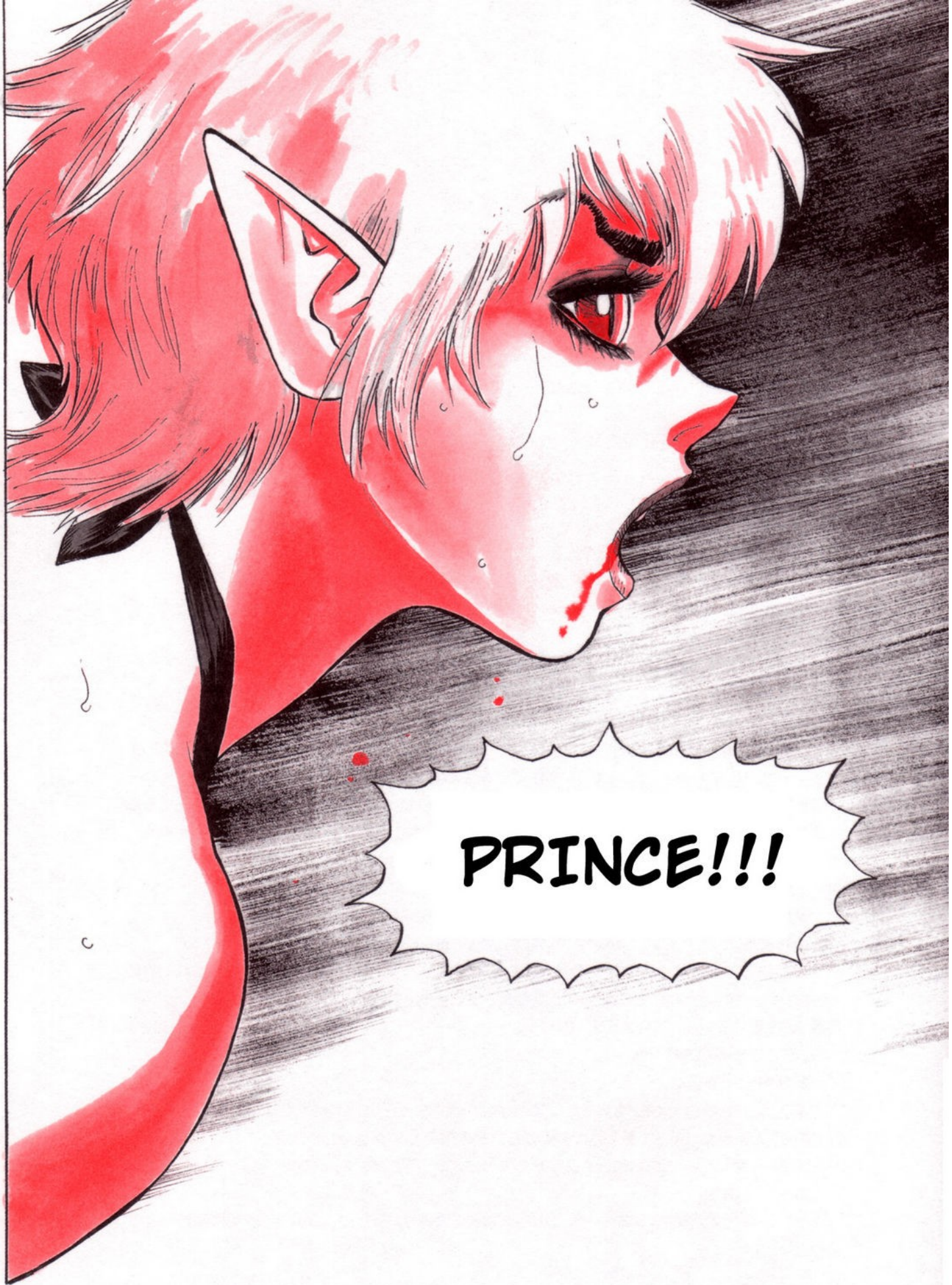
OOGH...

UGH

HAA...

HAH

HAAAH...



TO BE CONTINUED

雑文 「アーニスの原点」

「コブラの舞だよ、いとしい姫よ」トゥトラスメクは笑った。「何世紀も昔、ハヌマンのささげ物になる処女たちがそうして踊ったものだーしかしそんなに美しくしなやかだったことはない。踊れ、舞姫よ、踊れ！どのくらいその毒牙から逃げていられるかな。何分か？何時間か？おまえとてもいつかは疲れるときがくる。そのすばやい、たしかな足どりもつまずき、脚はよろめき、腰もゆっくりしかまわらなくなる。そのときその牙がおまえの象牙色の体に深くくいこむのだー」

『狂戦士コナン』（ロバート・E・ハワード／著 鏡明／訳 ハヤカワ文庫SF）収録
「ザンボーラの影」より

アーニスの原点。

それは言い換えれば山本貴嗣の漫画の原点ということである。

なぜなら、この女戦士アーニスのシリーズほど、山本の描きたい世界を詰め込んだ作品は、あまり例がないからだ。

強く美しい（「強く」が「美しい」より先にくるあたり、自分で書いていて笑ってしまうが）女戦士が、さまざまな苦難に（酷い目に）会い、死闘の果てに勝利する。

幼い頃から私はこのモチーフが好きだった。

最初は漫画やテレビ、映画で見た男性の主人公（『8マン』とか『ウルトラマン』とか『ターザン』とか…）を元にイメージしていたが、小学校の6年生くらいに異性に目覚め、その瞬間からヒーローはヒロインへと取って代わった。ちなみに、私の作品には巨大ロボットというジャンルはない。敵に攻められた主人公が悶えてなんぼ、ロボットは悶えないからである（『8マン』はロボットでも悶えてくれた。等身大の苦痛がない存在には興味がないのだ）。

幼い頃からSF好きだった私は、中学に入って創元やハヤカワのSF文庫に目覚めた。

それまでジュブナイルでしか読んでいなかったSFを、まっとうな全訳で読めるようになった。

ヒロイックファンタジーやスペースオペラからハードSFと言われるものまで、あれやこれやを読みまくった。少なくとも前述の二つの出版社から出る新刊と呼べるSFはほとんど目を通したように思う。古書店を巡ってSFマガジンのバックナンバーやハヤカワのSFシリーズなども買いあさった。思えば甘美な時代であった。

あれから30年近く。

最近ではSFと名の付くモノもめったに買わなくなりましたが、40代も半ばになった今、これまでのSF人生を振り返って思うのは、私の心に最も強烈な印象を残した作品。それはE. R. バロースの「火星」シリーズを始めとする一連のスペースオペラと、R. E. ハワードの『コナン』シリーズである。

ラリー・ニーブンのノウンスペース・シリーズなども大好きだったが、この二つの前には影がかすむ。

なんのことかわからないと言われる方のために少しだけ解説しよう。

エドガー・ライス・バローズは小説家である。

19世紀後半に生まれ20世紀の半ばに亡くなった。

知ってる人は知っている超有名人だが知らない人は全然知らない(のだろう)。

ご存じない方は、あの『ターザン』の原作者だと言えば「ふーん」くらいは思っていただけでも知れない。

しかし私にとって、この作家は『ターザン』と言うよりも『火星のプリンセス』に始まる「火星シリーズ」の作者であり、「金星シリーズ」の作者であり「地底世界ペルシダー・シリーズ」の作者である(他にもまだあるが省略する)。

日本では少年少女向けのSF全集の一冊や創元推理文庫やハヤカワなどのSFシリーズの一部として紹介されたが、SFというにはあまりに科学から大きく隔たった作品も少なくない。中でも代表作の『火星シリーズ』は、主人公のジョン・カーター(某テレビドラマの医師カーターくんと同じ名だ♪私はあれは絶対にわざとだと思っている)が幽体離脱ともなんともつかぬ現象で気がつくと火星の大地に実体化していて、美しい姫を助けて様々な怪物や火星人たちと、恋やアクションを繰り広げる荒唐無稽な物語である。SFと言うよりもむしろヒロイック・ファンタジー、いやスペースオペラと呼ぶべきか。

しかしそんな分類などどうでもいい。

要は子どもだった私にとって、それがたまたまなくおもしろい物語だったということだ。

私のバローズとの最初の遭遇は小学生の頃だった。

図書館の子供向けのSF全集で初めて読んだのが『火星のプリンセス』である。

当時はタイトルが『火星のジョン・カーター』あるいは『火星の王女』だったと思うが、そんなこともどうでもよろしい。

「火星シリーズ」は何作もあって日本では創元推理文庫から全11巻で1960年代に発売された。子供向けはその中から代表的な1, 2作を選んでジュブナイルにされたもので、私が創元のシリーズと出会ってその全貌を知るのは中学生(1971年)になってからである。

「考証」とか「リアリティ(科学的な意味でとかの)」ははっきり言って「ない」。

何しろ作中の火星(火星人は「バルスーム」と呼ぶ。地球のことは「ジャスーム」である)には呼吸できる大気があり、地球人と寸分たがわぬ姿で寿命は1000歳を超える卵生の赤色人とか、下あごから大きな牙がはえ目玉の飛び出した4本腕の緑色人とかがいて、地球よりも進んだ科学兵器を有している一方で、戦う際はもっぱら剣を抜き、肉弾戦を繰り広げる。

突っ込みどころ満載の物語である。

書かれた年代が1911年ということも考慮に入れてもむちゃな話である。

しかし、とにかくおもしろいのだ。

創元版のあとがきに、訳者の厚木淳氏(2003年の5月に亡くなられた。心よりご冥福をお祈りします)が製作途中の思い出として、校正者が「こんなおもしろい小説を読んだのは初めてだ」と言ったというエピソードを記しておられたが、実にもっともなことである。

これらの作品をご存じない方にどうおもしろいかと説明するのは難しい。

一番いいのは読んでいただくことである。

もっとも「出会うタイミング」というのはけっこう大きな要素かも知れず、私のように子供の頃とり

こになった者と、大人になってから読んだ人とは随分違った印象を持つことであろう。

「火星シリーズ」は本来11巻であったが、現在は東京創元社より2～3巻ずつを一冊にまとめた合本で全4巻

第一集『火星のプリンセス』

第二集『火星の幻兵团』

第三集『火星の秘密兵器』

第四集『火星の古代帝国』

として売られている。

主人公は強く正しく美しく、正義と真実の人である。卑怯なマネはけしてしない。

私の妻が手にとってパラパラとページをめくり

「男は戦士か王か貴族か奴隷、女は姫か奴隷なのね」

と言った。いや女も王妃か貴族か奴隷なのだが(正確にはもっと色々あるのだが、男はマッドサイエンティストもいるし)確かにそう言っただけでも間違いではない。

単純明快な勧善懲悪の冒険ロマン。

いやそんなことを言っても未読の方には何がなにやらわかるまい。

というわけでこの際その内容についてここでお伝えするのは諦める。そもそも無理な相談だ。というわけでこの項、ご存じない方々にはなにやらちんぷんかんぷんな話になると思う。つき合いきれないと思われたら切り上げてくださいませ。

ただこの山本貴嗣にとって大きな原風景の一つを形作ったのが「火星シリーズ」に始まるパローズの作品群であったことは間違いないのである。

ロバート・E・ハワードは作家である。

パローズと同じく知っている人は知っている超有名人だが、知らない人は全然知らない。

20世紀の始めに生まれたアメリカ人で、あのコナン(探偵でも未来少年でもない、蛮人コナン)の生みの親である。

コナン以外にも冒険小説、探偵小説、ボクシング小説、詩その他様々な作品を書いたが、私にとっては何んと言っても『コナン』の作家だ。

中学生の頃、ハヤカワの文庫で私は出会い、いっぺんで魅了されてしまった。

かのシュワルツェネッガーが主演した映画はご存知の方も多いたろうが、あれは原作の登場人物を適当にアレンジしてパッチワークのように組み合わせ、オリジナルの物語にってしまった、ほとんど別物である。

一作目の『コナン・ザ・グレート』はまだしも、二作目の『キング・オブ・デストロイヤー』は「お子様向け」に仕上げたため、作品本来のダークな部分がすっかり削げ落ちたお子様ランチになってしまった。あれを見てコナンと思っていただけでは困るのである。

蛇足だが私はあの女王役のサラ・ダグラスが好きで、映画をお子様向きにするため編集段階でカットされたというシュワちゃんとのラヴ・シーンがなんとか見たい。成人指定の完全版を出してくれないものかなあと今でも心より願っている。

それはさておき、そう、コナンの魅力は言うなれば闇の中に燃えさかる青い炎のような、禍々しく荒ぶる力の絵巻である。パローズの火星シリーズがジュブナイル小説になりうる健全さを持ち合わせているのに対し、お子様お断りな黒い影を引きずる作品世界。

パローズに魅せられていた時期と一部重複はするものの、成長と共にパローズからハワードへ、私の興味は移行していった。

超古代、異なる文明が栄えていた地球を舞台に、主人公の蛮人コナンが剣と魔法の世界を行く。彼は「力」の権化である。生まれ持った肉体を武器に、魔物や魔道士と戦って勝つ。人間相手は言うまでも無い。その剛速球勝負な物語は、ほかでは味わえない魅力があった。

『コナン』は創元とハヤカワそれぞれの文庫で翻訳がなされていた(過去形)。

いずれも昭和40年代に出版されたもので、今では絶版かおそらくそれに近い状態である。

現在一般の書店で入手可能なものは、アンソロジーの一編として収められたものしかないのではあるまいか。2003年の3月に河出文庫より出た『不死鳥の剣<剣と魔法の物語傑作選>』(中村融/編)にはタイトルにもなっているコナンの記念すべき第一作(The Phoenix on the Sword)が新訳されている(蛇足であるが編者であり訳者である中村氏は私の大学時代の旧知である)。

話は戻る。

この雑文の冒頭にかかげた一文をお読みいただければお判りと思うが(数あるコナンの物語の中からわざわざあの下りを選ぶところが山本の人格が知れる)(笑)(なお踊らされている「舞姫」は全裸である)、その世界はローティーンだった山本にとって見たこともない禁断の果実であった。情報があふれかえりあらゆる刺激に飽食した21世紀の現代ではない、1970年代初頭のローティーンである。鬱憤と煩悩にはちきれそうだった中学生の私にとって、そこはパローズに続く「第二の桃源郷」であったのだ。

孤独な中坊の私はコナンとともに超古代の世界を歩き、経巡り、傷つき戦った。

それらは甘美な思い出である。

私の心に深く刻まれ、昨日のこのように懐かしく思い起こされなお生き生きと息づいている。

パローズとハワード。火星とコナン。それらはあたかも車の両輪のように、私の心を運んで行った。私の胸のガレージには今でもそれがしまわれている。いつでも動ける状態で。そして実際動かしている。

中学生の頃、私はコナンを女性に置き換えたような、あるいはコナンに登場する女戦士を主人公にしたような作品を読みたいと思った。同人の小説として当時少しばかり書いてもみた(当時は同人で漫画だけでなく小説も書いていた。田舎の中学校に「漫研」などというものはなかったし、学校で自分の好きな世界をおおびらに描くには「文芸部」に入るのが一番近道だったのだ)。

長じて漫画家になる夢を果たし、その思いを少しばかり形を変えて実現したのが拙著『剣(つるぎ)の国のアーニス』(大日本絵画・刊)であった。

同作に登場する天才外科医ラージンは火星のマスター・マインド、大科学者のラス・サヴァスである。剣の達人のアーニスは、ある意味で火星シリーズの主人公ジョン・カーターでもあり、悪魔さえも切り伏せる力の権化コナンの変形、様々な女戦士の合成体でもあった。

私の中にそれらの「種」、かけがえのない「原型」を与えてくれたパローズとハワードと訳者の方々、そして両作品の名イラストレーター、故・武部本一郎画伯に心よりの感謝を捧げる。

これらの人々がいなければ、私の漫画家人生は随分と異なった道を歩んだことだろう。そして何よりも、アーニスというキャラクターが生まれることもなく、今皆様がこうして、この拙い本を手にしておられることもなかったに違いない。

追伸(あるいは近況報告)

これを書いている2003年7月末現在、私はある仕事の依頼を受けている。

それはある小説のカヴァーとイラストである。

その本が出版されたのは今を去ること30年以上前。児童書で有名な書店からだった。私はそれを図書館で読んだ。いや小学校の図書室だった。

見たこともない物語に引き込まれ、私の胸は高鳴った。遠い世界の冒険譚。

長い長い月日が流れた。

幼くやせっぽちだった私は、いつの間にか脂肪率を気にするオヤジになった。

ふと舞い込んだ思わぬ依頼。

私は耳を疑った。実は今でも疑っている。これはなにかの間違いではないか。まさか新手の詐欺ではないか。いや、たとえ本当であったにせよ、実現間際でチャラになりはしないか。何事につけ悲観論者の山本は、悪いことばかり考えてしまう(笑)。

だって 夢のようなのだ。

幼い頃読んだあの本を、あの単行本のイラストを、私がこの手でリニューアルするのだ。最初は断ろうかと思った。

仕事も立て込んでいるし、なにより作品がヤバ過ぎる。

偉大な先人たちの傑作が山のようにそびえたち、何を描いても笑われる。石を投げられるのは目に見えている。火中の栗を自分から、わざわざ捨てることはない。

しかし待てよと声がした。

描いて後悔するか描かずにするか。どうせ後悔するなら描いた方がいい。

私が描かなくても誰かが描くのだ。どうせ石を投げられるなら私が投げられよう。

そして私は仕事を受けた。

この本を皆様が読まれる頃は、描き上げているはずである。

9月中には印刷が終わり10月ごろには書店に並ぶ。

岩崎書店の『火星のプリンセス』(冒険ファンタジー名作選2 エドガー・R・バローズ・作 亀山龍樹・訳)。

興味のある方はご覧ください。

2003年 7月

山本貴嗣



注 意

—— お買い上げになる前に ——

本作品には、暴力シーンやグロテスクな表現が含まれています。お子様の手の届かない所に保管して下さい。

内容について

この『魔笛』は、1997年冬のコミック・マーケットより不定期に刊行を開始した「女戦士アーニス」のシリーズの第六冊目（第六話）に当たります。

これ一冊で完結した作品ではありません事を、ご了承くださいました上、お買い求めください。

魔笛

山本貴嗣

© 2003 Atsuji Yamamoto

2003年8月17日 初版第一刷発行

発行 あつじ屋
印刷 (株) 翔美

⇒YAMAMOTO ATSUKI← MAGIC RECORDER

TRANSLATED BY: **cheesey**

EDITED BY: **Lunatic**

I HAVE NO SITE, I'M JUST A FREELANCE
EDITOR WITH A TWISTED TASTE :)

IF YOU WANT TO CREDIT ME, YOU CAN
DO SO BY CHIPPING IN TO MY BOUNTIES :)

